

1995年4月20日発行（毎月11回20日発行）第39巻第4号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道



4
1995

末日聖徒
イエスキリスト
教会

聖徒の道

1995年4月号



表紙——ハンガリー、ドナウバロスでセ
ミナリーに集っているフュア・マリア
(16歳)は、友人のベレッキー・クリス
ティーナ(16歳)から教会に誘われ、4カ
月後にバプテスマを受けた。ここでは彼
女のような例は珍しくない。セミナリー
クラスの生徒全員(裏表紙)が最近改宗
したばかりで、何人かはセミナリーク
ラスの生徒から福音を紹介され、バプテ
スマを受けた。(本誌「ドナウ河畔のセミナ
リー」p.34参照。写真撮影/表紙——ブ
ライアン・K・ケリー。裏表紙——マー
ビン・K・ガードナー)

こどものページ——「こどもをいやすイ
エスさま」 絵/ハリー・アンダーソン
© Review and Herald; 許可を得て掲載。

一般

大管長会メッセージ——輝く望み 第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー	2
「わたしはよみがえりであり、命である」 アレクサンダー・B・モリソン	10
過去とどう取り組むか ジャン・B・フィッシュ	18
ロバート・D・ヘイルズ長老——名誉の帰還 ラリーン・ガート	26
聞く耳 テッド・ハインドマーシュ	46

青少年

永遠の抱擁 エドワルド・パントハス・ソーリス	8
心の傷を癒す ポール・B・サーグッド	22
ドナウ河畔のセミナリー マービン・K・ガードナー	34
やってみよう デビッド・ハーサム	40
若人の広場	42

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——「奉仕、喜び……」	25

こども

「安かれ」	2
分かち合いの時間——わたしは天父の計画をしんじます カレン・ロフグリーン	4
あかしていい気持ちができるよ ブライアン・デイリー	6
特別なあかし人	8
短く二つ、長く一つ コリーン・C・ヒートン作	10
歌 ひかりかがやく春の日に バー吉ニア・モーン・カーメヤー、クロフォード・ゲイツ	13
モルモン経物語——ヒラマンと2,000人のわかいへいしたち	14
おもちゃばこ——イースターのバスケット D・A・ウッドリフ	16

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—チェコ語、ブルガリア語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：ハワード・W・ハンター、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ボイド・K・バックナー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット、ロバート・O・ヘイルズ、ジェフリー・R・ホランド
編集長：レックス・D・ピネガー、ジョー・J・クリステンセン

顧問：ウィリアム・R・ブラッドフォード、スペンサー・J・コンディー、ジョン・H・グローバーク

教科課程管理部責任者
実務部長：ロナルド・L・ナイトン
企画・編集ディレクター：ブライアン・K・ケリー
グラフィックスディレクター：アラン・R・ロイボーク
機関誌グラフィックスディレクター：M・M・カワサキ

国際機関誌
編集主幹：マービン・K・ガードナー
編集主幹補佐：R・バル・ジョンソン
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ティエーン・ウォーカー

工程管理：メアリー・アン・マーティン
アートディレクター：スコット・バン・カンペン
デザイナー：ジェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

予約購読スタッフ
購読管理ディレクター：B・レックス・ハリス
配送部長：クリス・クリステンセン
マーケティング部長：ジョイス・ハンセン、ケン・H・ソレンセン

聖徒の道 1995年4月号第39巻第4号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 リック/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,400円(送料共)
半年予約1,200円(送料共)
普通号/大会号200円

Copyright © 1995 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1993年10月 翻訳承認—1993年10月 原題—International Magazines April 1995. Japanese. 94984300
●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/00100-6-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。
●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito No Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

とてもすばらしいメッセージ

私が初めて宣教師と出会ったのは、1992年でした。最初のレッスンから心に何か特別なものを感じ、レッスンが進むにつれて、今まで考えてもみなかったさまざまな福音の原則を学んでいきました。初めて教会の集会に出席した時、教会員は私のことを前から知っていたかのように温かく迎えてくれました。

家族の中で私が最初にバプテスマを受けました。今ではふたりの姉妹も会員となり、父もモルモン経を読んでいます。

「リアホナ」(スペイン語版)を購読して何カ月かたちましたが、その内容にとっても満足しています。

大管長会メッセージとして、トーマス・S・モンソン副管長の「イエスが歩まれた道」という記事が掲載されたことがありました。私はモンソン副管長の勧告に深く感動しました。そこにはこう書かれていました。「イエスの言葉が唇にあり、イエスのみたまが心に宿っていれば、またイエスの教えが生活に溶け込んでいけば、ある意味において私たちは、この世の旅路を歩きながら、イエスの歩まれた道を歩むことができます。」

この機関誌に記されたメッセージから、非常にたくさん^{あかし}のことを学べます。聖徒とその証についての記事は、私だけでなく、まだ会員でない人々にとっても助けになります。

プエルトリコ、マヤゲステキー部
イサベラ支部
ワンダ・リベラ

再活発化

およそ7カ月間、私は教会の活動から遠ざかっていました。

しかし、その後「リアホナ」(スペイン語版)をじっくりと読むようになり、教会幹部の勧告が持つ力強さと説

得力に気づきました。

私は自分自身の経験から、教会であまり活発でない皆さんに、この機関誌や聖典にあるメッセージを読んで研究することをお勧めします。謙遜な気持ちでそうするならば、皆さんの証はとも強められ、教会に戻りたいという願いを抱くようになることでしょう。

ウルグアイ、イスラバトルーヤ
クリスティーノ・ロドリゲス

信仰深き友人

私と友人のアーナルドは、ふたりとも伝道に出ました。しかし帰還後、私は10年近く教会に活発に集っていませんでした。そんな中、アーナルドは私のために「リアホナ」(スペイン語版)を毎年予約してくれました。そして彼の信仰の働きはついに実を結びました。アーナルドと「リアホナ」のおかげで、私はまた活発になり、教会で責任を受け、再び神殿の祝福も受けられるようになったのです。

ペルー、アレキッパ中央ステキー部
ハンターワード部
アルベルト・テハーダ・チャコン

福音を基として

私は現在30歳で、改宗して2年になります。教会の教えとイエス・キリストの福音のおかげで、私の人生は変わりました。これからもこの福音に基を置いて生活しなければならぬと実感しています。「ジョン・トゥー・チャー・ジョン」(中国語版。「聖徒の声」の意)に記された証から、私はすばらしい励ましと助けを得ています。この機関誌を通じて証を分かち合ってください。会員の力がたがたに感謝しています。

ホンコンカオロン
香港九龍北ステキー部
サムスイボウ
深水埗ワード部
ラウンゴク
劉岳




輝く望み

第一副管長
ゴードン・B・ヒンクレー

ゲ ツセマネでの救い主の苦しみ、十字架、復活に人々が心を向ける復活祭の季節を迎え、私はひとつの経験を思い起こしています。それはアリゾナ神殿が全面的な改装の後で一般に公開された時のことです。全部で25万人ほどのかたがたが神殿の美しい内装をご覧になりました。最初の日にはほかの教会の聖職者が特別に招待され、何百人の方が訪問してくださいました。その見学が終わってから、私は彼らと話し、質問を受け、それに答える責任を受けていました。何か質問があれば喜んでお答えしますと言うと、さまざまな質問があり、私は一つ一つ答えていきました。この時、あるプロテスタントの牧師から、次のような質問がありました。

「この建物の中をひととおり見てきましたが、入り口の所にイエス・キリストの名前があっただけで、キリスト教の象徴である十字架はどこにもありませんでした。ほかの地に建てられているあなた方の教会の建物にも、同様に十字架は見受けられません。どうしてなのですか。あなた方もイエス・キリストを信じていると聞いていますが。」

私はこう答えました。「同じキリストの教えを奉じる者として、聖堂の尖塔や礼拝堂の祭壇に、また式服や書物などの上にも十字架をつけていらっしゃる皆さんの考えに異論を差し挟むつもりはありませんが、私たちは、十字架を『キリストの死



私たちは、
神の御子の誕生、
導きと教えを施す業、
その死と復活について
書かれているマタイ、
マルコ、ルカ、ヨハネの記録を誇りに
思っています。

ご自身の命を捧げてくださった贖い主の大いなる代価、すなわち、ゲツセマネの園における苦痛、
裁判の時にお受けになったひどいあざけり、十字架上で被られたこの上ない苦しみ、
私たちは決してこれらのことを忘れてはなりません。

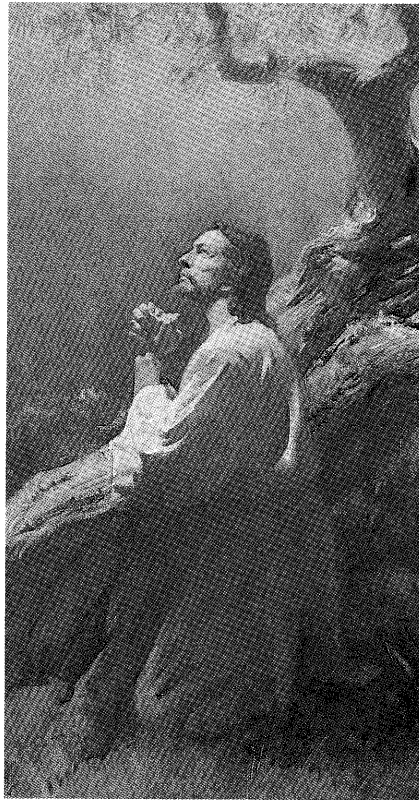
の象徴』と考えています。しかし、私たちが世の人々に伝えたいと願っているのは、生けるキリストにほかならないのです。」

すると彼はこう尋ねてきました。「十字架を使わないというのであれば、あなた方の宗教の象徴は一体どのようなものなのでしょうか。」

教会員の生活

私はそれに対して、「教会員の生き方そのものが、私たちの信仰を唯一体現する意義深いものとならなければなりません」と答えました。あの牧師が私の返事に対して独善的な考え方だ、という印象を持たないでくださるよう望んでいます。この教会では従軍牧師がその身分を証明するために制服に記章としてつける以外、十字架を用いません。その点において彼の言葉に間違いはありませんでした。

表面的に見れば、十字架を用いないのは、イエス・キリストを信仰の中心にするという私たちの信条と矛盾しているように思えるかもしれません。この教会の正式な名称は、末日聖徒イエス・キリスト教会です。私たちはイエス・キリストを主、そして救い主として礼拝しています。また聖書を聖典として受け入れ、メシヤの来臨を予言した旧約聖書の予言者たちの言葉は、神の靈感によって与えられたものであると信じています。神の御子、すなわち御父が肉において生みたもう独り子の誕生、導きと教えを施す業、その死と復活について書かれているマタイ、マ



CHRIST IN GETHSEMANE, BY HARRY ANDERSON

ルコ、ルカ、ヨハネの記録を誇りに思っています。古代のパウロと同じように、私たちは「福音を恥としない。それは、……救を得させる神の力」(ローマ1:16)だからです。また私たちは、ペテロと同じように、「私たちを救いうる名は〔イエス・キリスト〕を別にしては、……だれにも与えられていない」(使徒4:12)ことを確信しています。

キリストについて宣言する聖典

私たちが、新世界で与えられた契約の書として受け入れているモルモン経には、昔西半球に住んでいた予言者の教えが書かれています。モルモン経は、ユダヤのベツレヘムで生まれ、カルバリの丘で亡くなられたお方について証する書物です。モルモン経は信仰が揺

らいでいるこの世界に対し、主の神性を強く証するもうひとつの証です。モルモン経の「とびらの言」は、約1,500年前にアメリカ大陸に住んでいた予言者が書いたものです。そこには、モルモン経が書かれた目的について、はっきりとこう記されています。「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させることである。」

主は現代の啓示の書、教義と聖約の中で、ご自身について次のような明らかな言葉で宣言しておられます。「われはアルパにしてオメガなり。主なるキリストなり。すなわちわれは始めにして終りなり。世の贖い主なり。」(教義と聖約19:1)

これらの宣言や証を聞いて、アリゾナのあの聖職者と同じように、「イエス・キリストを信じているのなら、なぜキリストの死の象徴であるカルバリの十字架を用いないのですか」と疑問に思う人もいるでしょう。

私たちはキリストを忘れてはならない

そのような疑問に対し、まず答えておかなければならないことがあります。それは、全人類を救うためにご自身の命を捧げてくださった贖い主の大いなる代価を、この教会の会員であるかぎり、決して忘れてはならないということです。ゲツセマネの園における苦痛、裁判の時にお受けになったひどいあざけり、肉に食い込んだ残酷なばらの冠、ピラトの前における暴徒た

マリヤは復活した主を最初に目にした時、主を意味する「ラボニ」（ヨハネ20：16）

と叫びましたが、それは確かに的を射た呼び方でした。

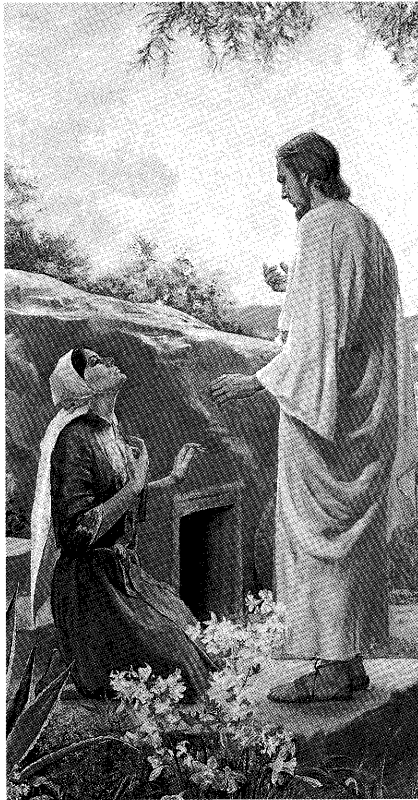
なぜなら、イエスは命の主というだけにとどまらず、死をも克服された主となられたからです。

ちの血に飢えた叫び、おひとりで重い十字架を背負い、よろめき進まれたカルバリへの道、大きなくぎで手足を刺し貫かれた時の激痛、あの悲しみの日に十字架上で被られたこの上ない苦しみ、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」（ルカ23：34）という神の御子の叫び、私たちは決してこれらのことを忘れてはなりません。

これがキリストの十字架が示している事柄です。十字架はキリスト、すなわち平和の君を苦しめ、滅ぼすために用いられた恐ろしい刑具であり、病人を癒し、盲人の目を開き、死人をよみがえらせてくださった救い主の奇跡のみ業に対して与えられた悪意に満ちた報酬でした。キリストは、寂しいゴルゴタの丘に立つこの十字架におかかりになり、息を引き取られたのです。

全人類のためのキリストの犠牲

私たちはこれらのことを忘れられません。決して忘れてはならないのです。救い主、また贖い主、神の御子であられるお方は、確かにこの十字架の上で、私たち一人一人のための身代わりの犠牲としてご自身を捧げられたのです。やがてユダヤ教の安息日を前にしたその日の夕べに、イエスの遺骸は十字架から降ろされ、慌ただしく借り物の墓の中に横たえられました。夜の深い闇は、イエスに最も献身的に、また親しく仕えた弟子たちの望みをさえ奪いました。救い主が以前に語られた言葉を理解していなかった弟子たちは、ただ



THE RESURRECTION, BY HARRY ANDERSON

嘆き悲しむばかりでした。メシヤと信じ、すべての望みと信仰を託していた主が亡くなってしまわれたのです。永遠の生命について語り、ラザロを墓からよみがえらせたあのお方が、すべての人の例に漏れず、亡くなってしまわれたのです。短く、悲しみに満ちたイエスの生涯はかくして幕を閉じました。まさしくその昔イザヤが予言したとおりでした。イザヤは主について次のように書いています。「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。……」

彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめを受けて、われわれに平安を与え……たのだ。」（欽定訳イザヤ53：3, 5）主は彼らの前からそのみ姿を隠してしまわれたのです。

イエスを愛していた人々が、今は土曜日と言われているその安息日の長い夜をどのような思いで過ごしたか、私たちにはただ想像することしかできません。

歴史上…最も偉大な奇跡

やがて週の初めの日の夜明けがやって来ました。今、私たちはその日を主の安息日としています。悲しみに打ちひしがれてその墓に足を運んだ人々の前に天使が現われ、こう宣言しました。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。」（ルカ24：5）

「もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。」（マタイ28：6）

それは人類の歴史の中で最も偉大な奇跡でした。イエスはかつて弟子たちに「わたしはよみがえりであり、命である」（ヨハネ11：25）と語られたことがありましたが、彼らにはそれが理解できませんでした。しかし、今初めて彼らはその意味を悟ったのです。悲しみと苦しみ、孤独のうちに亡くなられた主が、その3日後には力と美と命をまとい、死の眠りについた人々の初穂としてよみがえられたのです。イエスの復活は「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」（Iコリント15：22）という保証を、あらゆる時代の人々に与えるものでした。

カルバリで息を引き取られたイエス

復活された救い主は、2階の部屋にみ姿を現わされた時、
「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20：27)
という忘れることのできない言葉を語られました。

が、いまや生けるキリストとして墓からよみがえられたのです。十字架はユダの裏切りがもたらした残酷な結果であり、ペテロの否定の後に続いた悲しい出来事でした。空になったその墓は、イエスの神性^{あかし}を証し、人々に永遠の生命への確信を与え、「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」(ヨブ14：14)というヨブの質問に対して答えを与えるものでした。

命の主

もしそのまま死の眠りの中にとどまっていたら、イエスの名は人々から忘れ去られ、よくても数ある偉大な教師の中のひとりとして、歴史書の数行に書き留められるにすぎなかったでしょう。しかし、死からよみがえったイエスは、いまや命の主となられたのです。そして主の弟子たちは、イザヤとともに固い確信を持って声を上げられるようになりました。「その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』となえられる。」(イザヤ9：6)

かくして、望みに満ちあふれたヨブの言葉が成就しました。彼は次のように語っています。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、末の日に彼は必ず地の上に立たれる。わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち、わたしは肉にあって神を見るであろう。

しかもわたしのこの目で見るとは。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んで



BEHOLD MY HANDS AND FEET, BY HARRY ANDERSON

こがれる。」(欽定訳ヨブ19：25-27)

マリヤは復活した主を最初に目にした時、主を意味する「ラボニ」(ヨハネ20：16)と叫びましたが、それは確かに的を射た呼び方でした。なぜなら、イエスは命の主というだけにとどまらず、死をも克服された主となられたからです。死のとげは消え去り、墓の勝利は過去のものとなったのです。

人を恐れていたペテロは、以前と変わって強い人格を身につけました。疑い深かったトマスさえ、確かな事実を前にして、心の底から深い敬意^{けいけん}の念を持って「わが主よ、わが神よ」(ヨハネ20：28)と語るようになりました。主はトマスにみ姿を現わされたあのすばらしい日に、「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20：27)という忘れることのできない言葉を語られたのでした。

主はその後も多くの人々にみ姿を現わされました。パウロも主が「五百人以上の兄弟たちに、同時に現われた」(Iコリント15：6)と記しています。

西半球への主の訪れ

主がかつて語られたとおりに、西半球にもほかの羊がいました。ある時、この民の耳に「天から出てくるような声が聞えた……その声は、

『わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。』……

また天を仰ぐと、天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。このお方は白い衣を召して、降ってきて群衆の中に立ちたもうた。……

時にそのお方は手を差し伸べて群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。……

起ちてわれに近づけ』と。」(IIIニーファイ11：3, 6, 7-10, 14)

モルモン経には、復活された主がその後、古代アメリカ大陸の民に恵みと導きを施された時のすばらしい光景が数多く描かれています。

現代の証人

そして今、地上には現代の証人たちがいます。全人類の主がこの神権時代、つまり予言されていた時満ちたる神権時代の幕を開けるために、再び地上に來られたことを証する者たちです。復

この神権時代、復活された生ける救い主はカートランド神殿で
 ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリにみ姿を現わされ、こう宣言された。
 「われは始めなり終りなり。われは生ける者なり。」(教義と聖約110：4)

活された生ける主と、その御父であられる天の神が、輝かしい示現のうちにひとりの少年予言者にみ姿を現わし、古代の民に知られていた真理を回復するためのみ業を新たに始められました。そして文字どおり「多くの証人〔が〕雲のように」(ヘブル12：1) それに続きました。示現を受けた現代の予言者ジョセフ・スミスは、厳かに次のように宣言しています。

「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。

われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生まれたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76：22-24)

そして、さらに主が確かに生きておられることを聖霊の力によって厳肅に宣言する何百万人という人々の証が続き、それは今も続いています。その証は人々の慰めとなり、力となっています。

私たちは主の戒めに 従わなければならない

救い主は今も生きておられます。私たちが、主の死の象徴を信仰のしるしとして用いないのはそのためです。では私たちは信仰のしるしとして何を用



THE LORD'S APPEARANCE TO JOSEPH SMITH AND OLIVER COWDERY IN THE KIRTLAND TEMPLE, 3 APRIL 1836, BY THEODORE GORKA

いるべきなのでしょう。いかなるしるし、芸術、形も、生けるキリストの栄光とすばらしさを表現するには適切とは言えません。主ご自身は、何を象徴とすべきかについて、次のようにおっしゃっています。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14：15)

主に従う者である私たちが、下品で、卑しく、見苦しい行ないをするなら、主の象徴を汚してしまうこととなります。逆に、よい行ない、憐れみと惜しみない愛の行ないをするなら、キリストの象徴をさらに明るく輝かすことができます。私たちはキリストのみ名を受けているのです。

私たちは、自分たちの生活を意義深いものとし、それをもって象徴としなければなりません。生けるキリスト、

生ける神の永遠の御子への証を、各自の生き方を通して宣言しなければならないのです。

兄弟姉妹の皆さん、これは簡潔ですが、深遠な意味を持っています。決してそのことを忘れないでください。

贖いの主、神生きて、われ恵む
 苦しみと死とに、勝利せし王よ
 主はわれらの岩、輝く望みよ
 善き道を照らす、永遠のかなたへと
 みたまをそそぎて、平和授けたまえ
 行く道細くも、神、われ導く
 (賛美歌73番) □

ホームテイニーチャーへの提案

1. 私たちは、すべての人に永遠の生命を得させるために、贖い主がゲツセマネとカルバリで払われた大きな代価を忘れてはならない。
2. 主が亡くなられてから3日目に、人類の歴史上最も偉大な奇跡、すなわち主イエス・キリストの復活が起こった。
3. イエスはエルサレムとガリラヤで弟子たちにみ姿を現わされ、教えを授けられた。
4. イエスは古代アメリカの民を訪れ、恵みと導きを施された。
5. イエスは現代においても、予言者ジョセフ・スミスやそのほかの証人たちにみ姿を現わし、教えを授けられた。
6. 私たちの生活は、生けるキリストへの証を体現したものでなければならぬ。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14：15)

永遠の抱擁

エドワルド・パントハス・ソーリス

期待に胸躍らせて宣教師推薦書に必要な事項を記入していた時のことです。私は、奉仕の意欲に燃えていた一方で、何か別の気持ちも感じていました。それは口では説明できない感情で、穏やかながらも、何かを知らせるような特別な気持ちでした。でもその時はそれが何なのかあまり気に留めませんでした。

自国メキシコのメリダ伝道部で働く召しを受けた時、確かに主からの召しであると感じました。同時に、あの特別な気持ちもよみがえってきました。そして、今度はそれが何なのかわかりました。伝道から戻るところには、大切な人がひとりいなくなっているだろう、ということだったのです。さらに、この気持ちは主から来たのだとわかりました。穏やかで平安だったからです。

父と母、おいのイスラエルが、宣教師訓練センターまで見送りに来てくれました。別れのあいさつをしながら、私は父をやさしく抱き締めました。この時、父の愛を感じるとともに、またあの気持ちを感じたのでした。

伝道を始めた当初から、主の愛を感じました。以来、幾度かあの気持ちを感じました。つまり「伝道から帰った時、もう父には会えないだろう」と。でも恐れはなく、ただ主のみこころのままに従おうという気持ちでいました。

1993年の「母の日」には、母親に電話をかけることができました。電話の母の声からは、隠し切れない悲しみが伝わってきました。

「母さん、一体どうしたの。」

「何でもないわ。頑張って伝道を続けなさい。」

「そうするよ。でも教えて、一体何が起きたの。」

するとようやく答えてくれました。「父さんが重病なの。もう歩くこともできないわ。医者^の診断では、脳に腫瘍^{しゅよう}ができてるって。しっかりするのよ。どんなことになっても……。」

父は私と話したいと言い、電話口まで連れて来てもらうと、弱々しい声でこう言いました。「エドワルド、お

まえの召しは主からのものだ。私のことは心配せず、たゆまずに働き続けなさい。これからも続けて福音を^の宣べ伝えていくんだよ。」「わかった。そうするよ」と返答しましたが、父の衰弱はひどく、私の言葉を聞く力も尽きたようでした。

それから3週間後に父は亡くなりました。その知らせを受けた時、父とともに経験したあらゆる出来事が頭の中を駆け巡りました。信仰深くすばらしい模範だった父は、私にとってだれよりも大切な存在となっていたのです。

父が亡くなってからというもの、教会員でなかった姉は、しきりに家に帰るよう勧めてきました。伝道部長は許可してくれましたが、伝道の大切さを考えると私はとても帰る気にはなれませんでした。父もそう願っていると思いました。だから帰らないことにしました。そして姉が納得してくれるよう、天父に願い求めると、天父は祈りにこたえてくださいました。電話で話しているうちに姉は心を和らげてくれ、私の決心に怒ることもなく、かえってこう言ってくれたのです。「わかったわ。教会はあなたにとって、とても大切なのね。あなたはよいことをしているのだし、私も応援するわ。」

伝道の間じゅうずっと天父は慰めを与えてくださいました。帰還した時、いちばんの友であり、教師であった父に出迎えてもらうことはできませんでした。しかし、救い主^{あがな}の贖いと復活に対する信仰により、力が与えられました。宣教師訓練センターに入る前の日に、両親と結び固めを受けられたことに感謝しています。父と再び会い、永遠の愛情を込めて抱き締め合える日が必ず来ると信じています。□

エドワルド・パントハス・ソーリス長老。メキシコシティのアラメダ公園にあるライオンの石像のわきで。







THE RESURRECTED CHRIST, BY GARY E. SMITH

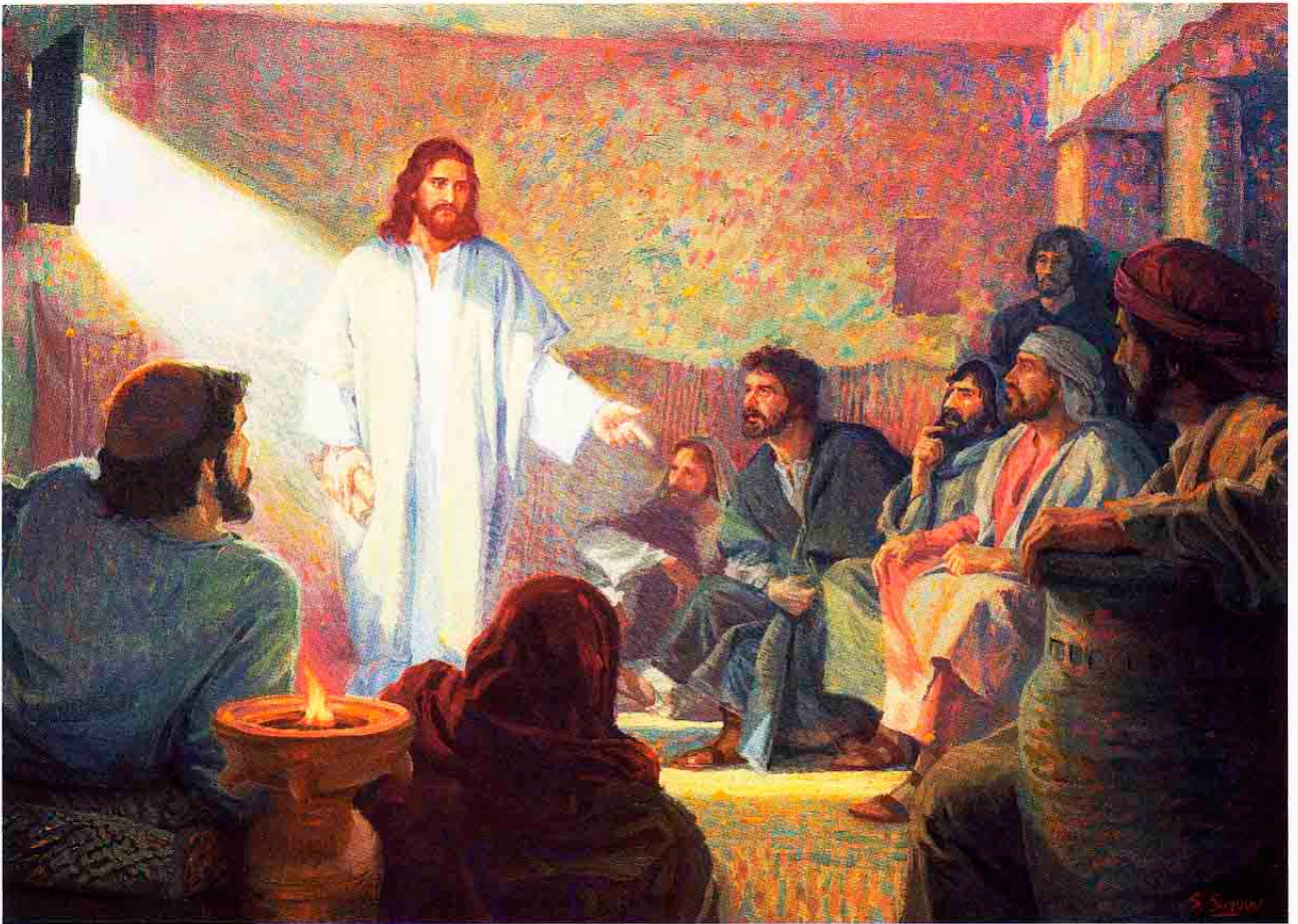
「わたしは よみがえり であり、 命である」

七十人
アレクサンダー・B・モリソン

イスラエルの聖者がどれほど偉大な存在であったか、それを余すところなく描写できる人がいるでしょうか。イスラエルの聖者は、私たちのために亡くなられ、そして「眠っている者の初穂」（I コリント15：20）となるために、再びよみがえられたのです。栄光と希望に輝くこの復活を完璧に表現することは、いかなる人間であろうと、不可能ではないかと思われます。私たちはどれほどの知性をもってしても、復活についてじゅうぶんに説明することなどできません。復活は人の経験をはるかに超越したものだからです。私たちは、ちょうど曇りガラスを通して輪郭だけをおぼろげに把握するように、真理の中の真理というべき復活の一部だけを、かいま見ているにすぎないのです。

まずこの話を、古代のある物語の紹介から始めたいと思います。それは非常に古い物語で、時代としてはモーセの著作よりもはるか昔にさかのぼります。その物語とは、古代の王であった

聖書の記述によれば、イエスは、最後に昇天されるまでの40日間に、多くの人々にそのみ姿を現わしておられる。また残った11人の使徒たちにもたびたびみ姿を現わされた。



THE RESURRECTED CHRIST, BY SCOTT M. SNOW

ギルガメシュの伝説です。ギルガメシュ王自身が実在したかどうかについては、物語自体よりもさらに昔にさかのぼって研究が続けられています。物語の内容は、紀元前7世紀ごろのものと思われる数枚の粘土板に書かれていました。その粘土板はアッシリア帝国のアッシュールバニパル王が建てた王立図書館から発見されました。物語の内容そのものは、モーセの時代から1,000年かそれ以上昔のもので、シュメールという古代の王国が舞台となっています。

この物語は、ギルガメシュがあらゆる賜のうちで最大の賜である不死不滅を探し求める話です。愛する友人であったエンキドゥーの死後、ギルガメシュは自分の生きている意味を見いだそうとして悩み、冒険と旅と享楽の追及を通じて、不死不滅を見つけ出そうと努力します。しかし、その試みは無

駄な努力に終わります。結局彼は、人の生涯は揺りかごと墓によって、すなわち誕生と死によって境界を設けられている、という結論に達したのです。

古代のギルガメシュの世界から遠く45世紀もの時空を超えても、現代の無数の老若男女がなと同じ悲しい結論に到達しています。また、アルマとアミュレクの教えを聞いていたゾーラム人の心の中にも、同じような悲しい結論があったのではないのでしょうか。アミュレクはゾーラム人の心の迷いを察知しました。ゾーラム人は、「神の道がはたしてその御子（イエス・キリスト）にあるか、またはキリストが本当に降臨したもうかと言う大きな疑問」（アルマ34：5）を抱いていたのです。

この疑問に対する私たちの答えは、シュメールのギルガメシュと同じ悲しい悩みを持ち続ける今の世の人々の耳に、真理を伝える明確な言葉として響

弟子たちは、2階に集まって、復活した救い主と会ったという人たちの言葉について話し合っていた。すると、「イエスが彼らの中にお立ちになった。（そして『やすかれ』と言われた。）」（ルカ24：36）

きわたっています。不死不滅とは何かを知りたいと長く望んでいたにもかかわらず、その答えを見いだせずにいたあらゆる人々に、私たちは次のように宣言します。ギルガメシュから25世紀を経てこの世に生を受けられたナザレのイエスこそ、人類に不死不滅をもたらされたお方である、と。イエスは文字どおり神の御子でした。つまり、母親である処女マリヤと全能の御父エロヒムの子供としてお生まれになったのです。イエスは、驚嘆すべき愛の福音を説かれましたが、最も身近にいた弟

子のひとりに裏切られ、茶番めいた裁判の席で残酷なまでに侮られ、ゴルゴタの丘でふたりの盗人の間に立つ十字架におかかりになり、亡くなられました。息絶えた遺骸が埋葬された墓は、他人から借りたものでした。その入り口は大きな石で封印され、ローマの兵士が墓の警備のために配置されました。しかし、信仰深い女性たちがあの最初の復活祭に当たる安息日の朝、愛する師の亡骸に香料と香油を塗るために墓を訪ねた時、彼女たちが見たのは空になった墓でした。そして、み使いが、次のような不思議な言葉で語りかけました。それは、最も荘厳な問いかけの言葉でした。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」(ルカ24：5-6)

ルカはこの話を実際に目撃した人物から聞いたのかもしれませんが、イエスの母マリヤから聞いた可能性もあります。いずれにせよルカは、墓から戻って来た女性たちが見聞きしたことをごとごとく11人の使徒やほかの人々に話したと記録しています。しかし彼女たちは最初、その話を信じてもらえませんでした。使徒たちには、女性たちの言葉は「愚かな話のように思われて、それを信じなかった」のでした。(ルカ24：11)

いにしへの使徒たちが最初のうち、イエスが死からよみがえられたという知らせを信じられなかった理由はさまざまです。いちばんの理由は、大部分の使徒たちが人間としての経験にとらわれすぎていたことです。死はだれであっても避けられません。ひとたびこの世に生を受けたなら、だれもが通らなければならない経験なのです。ひとり残らず死を経験します。回避するこ

とはできません。ですから、弟子たちが初めのうち、イエスが死からよみがえられたという知らせを信じられなかったとしても、当然かもしれません。もちろん弟子たちは、ナインのやもめの息子が息を吹き返した出来事をその目で見ていますし(ルカ7：11-15参照)、また会堂司であったヤイロの娘の蘇生にも立ち会っていました。(マルコ5：35-43参照)さらに、イエスが愛した友ラザロの場合もそうでした。(ヨハネ11：43-44参照)しかし、どの場合も、死すべき肉体に回復したにすぎませんでした。つまり、彼らはこの世の生涯を終えた時には、もう一度死ななければならなかったのです。キリストの復活は、あらゆる人の経験を超越していました。それは、死からのよみがえりであり、この死すべき生涯を終えるのではなく永遠に生きるということでした。それにより、人類の行く末が永遠に変わったのです。

主の贖いによってもたらされた賜のひとつは、全人類が死からよみがえり、あらゆる人々に不死不滅がもたらされ、死と呼ばれる敵が永遠に打ち滅ぼされたことです。アミュレクは次のように言っています。「ここに於て霊と体とは再び合して完全な形となり、手足も骨の関節も私たちが今持っている本来の形に返……る。この復活はあらゆる人が全部受けるのであって、老若男女の区別なく悪人と善人とを問わず奴隷と自由人とのへだてなく、……完全な形にかえるのである。」(アルマ11：43-44、下線付加)

聖書の記録には、イエスのご自分の復活について「数々の確かな証拠」を残された、と書かれています。(使徒1：3参照)最終的に昇天されるまでの40日間に、主は数多くの人々にみ姿

を現わされました。復活したキリストにまみえた最初の方は、マグダラのマリヤでした。(ヨハネ20：16-17参照)ほかにも復活したキリストに会った女性たちがいました。ヤコブの母マリヤとサロメ、ヤコブとヨハネの母、ヨハンナ、スザンナなどです。(マタイ28：1-9；マルコ16：1；ルカ8：3；23：55-24：10参照)イエスはまた、エマオへ行く途中のふたりの弟子たちにもみ姿を現わされ(ルカ24：13-32参照)、さらにほかの使徒たちにも昇天の時を含め(使徒1：11参照)、たびたびみ姿を現わされました。(ルカ24：36-43；ヨハネ20：26-28；マタイ28：16-19参照)主は、漁をしていた使徒たちにも(ヨハネ21章参照)、ペテロにも(1コリント15：5参照)、ヤコブにも(1コリント15：7参照)、同時に500人以上の兄弟にも(1コリント15：6参照)、そして自分で「使徒たちの中でいちばん小さい者」と考えていたパウロにも(1コリント15：9参照)そのみ姿を現わされたのでした。

おそらく、モルモン経の中で最も栄光に満ちた記録は、復活されたキリストが信仰深いニーファイ人たちにもたびたびそのみ姿を現わされたと言われた部分ではないでしょうか。ニーファイの記録を抄録したモルモン版には、その最初の場面が次のようにいきいきと描かれています。

「群衆は、……天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。このお方は白い衣を召して、降ってきて群衆の中に立ちたもうた。群衆の目はみなこのお方の上に注がれたが、互いに物を言う勇気がなかった。みなは自分らに現われたこのお方を天使であるとは思っていたが、そのお方が降りたもうたわけは



CHRIST VISITS THE NEPHITES, BY JOHN SCOTT

救い主が復活された後、ニーファイ人たちは「天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。」このお方は、「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来たと証をしたるその者なり」(Ⅲニーファイ11：8-10)と言われた。

知らなかった。

時にそのお方は手を伸して群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。』(Ⅲニーファイ11：8-10)

近代になり、予言者ジョセフ・スミスは復活した救い主とたびたびまみえました。初めは、1820年の最初の示現の時でした。(ジョセフ・スミス2：16-17参照) さらに、ジョセフ・スミ

スとシドニー・リグドンは、1832年2月16日にオハイオ州ハイラムで栄光に満ちた訪れを受けました。この時ふたりは、救い主が「神の右に」おられるのを見、「諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ」ていることを知ったのでした。(教義と聖約76：22-24参照) 同じように驚くべき示現が、1836年4月3日にカートランド神殿で、ジョセフとオリヴァ・カウドリに与えられました。

「われらの心より覆い取去られて寛りの眼開かれたり。われらは、われらに面して教壇の胸欄に立ちたもう主を見たり。而して、主の脚下にはこはくの如き色したる純金の床ありき。

その眼は燃ゆる炎の如く、頭髮白きこと清き雪の如く、その顔は日の輝きにも勝りて光り輝き、その声は洪水の激する音の如し。誠にエホバの御声言

いたもう。

われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。(教義と聖約110：1-4)

イエスについて、またイエスの復活の事実について、さらにはイエスの史的実在性そのものについて、疑問に思ったり、冷めた見方をしたりすることが、現代の主流となりつつあります。悲しいことに、学識を積んだ人々の中にも、キリストのことをあざけったり、キリストが処女から誕生されたことや復活されたことを否定したり、キリストの戒めを嘲笑したり、永遠にわたって不動の価値を持つ山上の垂訓を、未熟で評価の定まっていない価値観で取って替えようとしたりする人々がいます。

もしサタンが、キリストがいないということを人に納得させたとしたなら、なんと大きな勝利を収めることでしょ



うか。実際、サタンは時の初めからこのために必死に取り組んできたのです。マタイの記録によれば、祭司長たちは、「弟子たちが夜中にきて、われわれの寝ている間に彼を盗んだ」（マタイ28：12-13）という話を広めさせるために、イエスの墓を警備していた兵卒たちに「たくさんのお金を与えた」と書かれています。兵卒たちは「金を受け取って、教えられたとおりにした」（15節）とありますが、実に嘆かわしい話です。

今日、自称クリスチャンの中にも、キリストの復活や待望の再臨を文字どおりに受け入れようとしない人々が増えています。そういう人々たちにとって、キリストの福音とは、おもに社交上の規約でしかなく、もっぱら貧困や無知、不正を正していくための教えくらいにしか理解されていないのです。イエスは偉大な教師であったとか、靈感に満

ちた道徳家であったとか、病を癒したり、奇跡を行なったりした人物であったとか言う人も確かに存在します。しかし、^{あがな}贖いを完成するために復活された救い主の重要な役割には、ますます関心がいなくなっているのです。それについては、パウロもはっきりと言っています。「もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなし。……もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいただいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。」（Iコリント15：14, 19）

予言者ジョセフ・スミスの復活に対する考え方は、この世の懐疑的な見方とはまったく著しい対称を成しています。「それ〔霊〕は、肉体の存在以前に存在していたのであり、肉体の中で

存在することもできるし、肉体から離れて存在することもできる。霊が離れたときには、肉体は朽ちてちりに戻り、そして、復活の時には、再び霊と合わさるのである。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.207）

末日聖徒の信仰は、世の人々の信仰とは異なっています。私たちの信仰は、聖典と生ける予言者たちの言葉にその^{いしづえ}礎を置くものであり、両者がともに、キリストこそ命の先駆けであると宣言しています。私たちは、ヤコブとともに、世界じゅうの人々に向かって、厳肅な^{あかし}気持ちで次のような証を宣言するものです。「墓と地獄とは何れもその中にある死者を出さなければならない、すなわち地獄はその捕えた霊を放ち、墓はその捕えた肉体を放たなければならない。そこで人の体と霊とはもとの通り一しよになるのであるが、これは全くイスラエルの聖者のもちたもう復活の



JOSEPH SMITH'S FIRST VISION, BY GREG K. OLSEN

ちから
能力による。」(IIニーファイ9:12)

イエスは復活されることによって、宇宙の歴史に新しい1章を書き加えられました。イエスこそ、あらゆる歴史の初めにあっても、時の絶頂にあっても、そして終わりにあっても、そのみ姿を現わされたお方であり、また現わされるお方なのです。私たちが信仰の目を持って「前兆と不思議とひながた」(モーサヤ3:15)とを読み取れるようになると、あらゆる真理がキリストについて証していることがわかるようになります。(IIニーファイ11:4参照)キリストは、真理と光、美と善との完璧な模範です。そして、いちばん大切なことは、キリストが命と愛の完全な模範だったということです。キリストが実践されたことは、十字架上で亡くなられたことも含めて、そのすべてが、愛のゆえに行なわれたことでした。ニーファイはそれを次のよう

に表現しています。「主なる神は世のためになることでなければ何事もなしたまわぬ。あらゆる人を自分のところへ引きよせるために、自分の命をぎせいになさるほど深く世の人を愛したもう。」(IIニーファイ26:24)

作家のC・S・ルイスは、「現在の事をありのまま」(モルモン経ヤコブ4:13)に見るという点では、並々ならぬ深い洞察力を發揮した人物ですが、彼は、人がひとたび頭の中に不死不滅という概念をはっきりと捕らえた暁には、どんなことができるようになるかについて、次のような文を書き残しています。

「『あなたがたも完全な者となりなさい』という戒めは、理想だけを述べた机上の空論でもなく、また、不可能なことを実践せよという命令でもない。〔キリストは〕我々を、その戒めを守れる存在にするおつもりなのである。

予言者ジョセフ・スミスが救い主と最初にまみえたのは、聖なる森の中であつた。この時、ジョセフ・スミスは「筆紙に^{あかし}尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が……真上の空中に立ちたもうのを見た。」(ジョセフ・スミス2:17)

キリストは(聖書の中で)、我々は『神々』であると言っておられる。キリストはご自分で言われたことを実践しようとしておられるのである。もし我々の方でキリストのそうした働きを受け入れる気があれば——というのは、我々の方で望まなければ、それを拒むこともできるのである——キリストは、我々のうちで最もか弱く、最も汚れた者をも、神々にしてくださるのである。輝かしい光を放つ不死不滅の存在にしてくださるのである。その時、我々は、

今の我々からは想像もできないような力と喜び、知恵と愛に満たされる。そして汚れのない、光り輝く鏡となり、神に対して、その限らない力と歓喜、善意とを完全に（もちろん、その輝きは神の光ほどではないけれども）放ち返すのだ。その過程は長く、ときによっては非常に心痛む出来事もあるだろう。しかし、我々はそうした経験を重ねていかなければならないのである。そこに妥協の余地はない。キリストは文字どおりの意味で『完全な者となりなさい』と言われたのだ。」（「純粋なキリスト教」p.160）

「あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ5：48）という戒めは、一朝一夕で実践できるものでもなければ、この世の生涯の終わりまでかけても完成できるものでもありません。私たちの弱点をことごとく克服し、自分を神と似た者とするためには、はるかに長い長い時間が必要です。キリストは復活することによって、私たちが不死不滅となる道を備えてくださっただけでなく、完成に向かってとにかく真剣に取り組んでみようとするうえで必要な時間も与えてくださっているのです。

墓のかなたにも生命があるという約束は、この世の生涯の境界外にある生活に対し、異なった見方を与えてくれます。自分が不死不滅の存在であることを知ると、生命というものは、墓をもって終わるのでもなければ、揺りかごをもって始まるのでもないことがわかります。私たちはこの地上に来る以前から生きていたのです。私たちは星に住む被造物であり、時の旅人です。はるかかなたからこの地上に来て、もし誠実に信仰を守り通したら、日の光栄の王国に戻り、私たちの霊の父である全能の神とともに住まうことができ

るという約束が与えられている者なのです。神の聖なる御子である救い主は、栄光に満ちた復活を通じてその道を開いてくださいました。そして、「慈愛の腕の中に」（教義と聖約6：20）私たちを抱こうとして、そこで待っておられます。

永遠の御父と死すべき体を持つ母親との間に生まれた御子として、キリストは死ぬ力と復活の栄光のうちに再びよみがえる力とを受け継いでいました。キリストは復活することによって、あらゆるものを超越する完全な力を持っておられることを明らかに示し、また、あらゆる敵を、しかも死という敵さえも、み力によってその支配下に置かれることを実際に示されたのです。キリストはあらゆるものを支配し、あらゆるものがキリストに従います。キリストがお命じになれば、もろもろの世界が創造され、キリストのみ言葉により、死者もよみがえるのです。

実際の復活を信じられるかどうかは、私たちににとっては信仰の具体的な試金石です。世に悪がはびこるにつれ、キリストを信ずる信仰は衰退しつつあります。そのようなひ弱な信仰で、ヨブが提起した「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」（ヨブ14：14）という疑問に、はっきりと「そのとおりである」と答えられるでしょうか。このヨブの問いかけに対する答えとも言えるキリストのみ言葉は、時代を超えて今この時に至るまで、高らかに響きわたっています。「わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである。」（ヨハネ14：19）

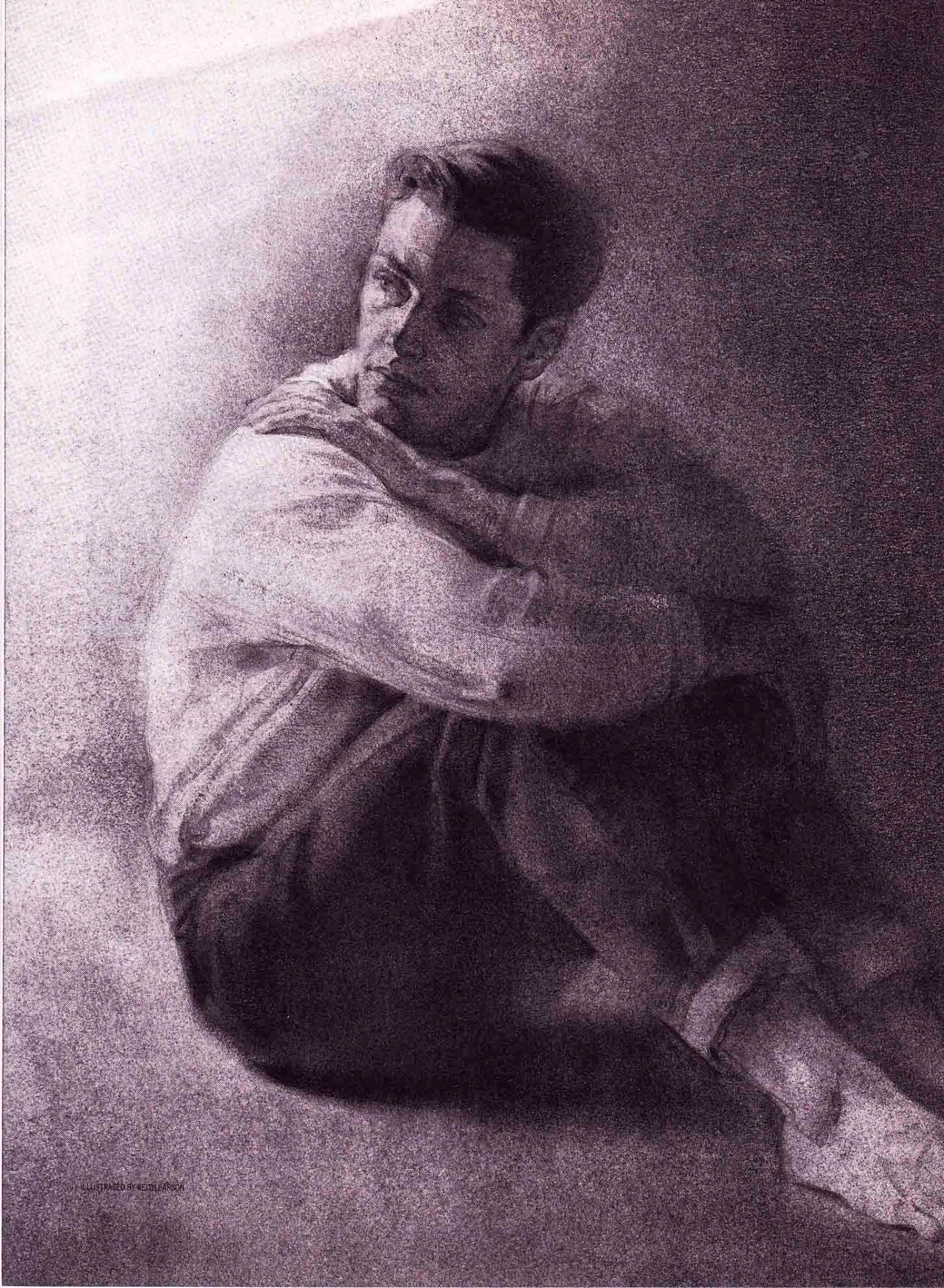
この話を終えるに当たって、最初のギルガメシュの物語に戻りましょう。この古代の王は、不死不滅を探し求めながら、ついに見つけ出すことができ

ませんでした。究極の真理を探し求めた、この王の旅の意義はどこにあるのでしょうか。簡単に言えば、こうです。人は、自分でどれだけ努力や工夫を重ねたところで、自分自身の能力だけに頼っているかぎり、生きることのほんとうの意味を見いだすことはできない、また、だれでも自分の力だけでは、人を無力に追い込む絶望的な考え方から抜け出せない、ということです。キリストの復活だけが、そうした絶望から逃れる道を備えてくれたのです。キリストは、墓の封印を解き、死とは消滅への扉ではなく、不死不滅と永遠の生命への扉であることを示されたのです。

イスラエルの聖者の偉大さと、その大いなる犠牲はまことにすばらしいものです。私たちは主からどれほど大きな恩を受けており、またこれからも受け続けることでしょうか。奇跡とは、私たちにどれほど多くの弱点や欠点があったとしても、主がお私たちを愛して下さり、決してお見捨てにならないということです。復活とは、天父の子供たちへの神の愛と、私たちをひとり残らず救うために亡くなられた、罪なく気高い救い主の愛を示す深遠な証拠なのです。

主は生けりと知る さち あた そは 幸を与う
死にし主は生きて と わ 永遠 に生きたもう
愛に恵みつつ 願い聞くために
また飢えたる霊を、救わんと生きたもう
（賛美歌75番）□

この記事は、1994年3月17日に七十人定員会の集会において発表された資料を要約したものです。



ILLUSTRATED BY KEITH ARSON

過去と どう取り組むか

ジャン・B・フィッシュ

人生で最高の祝福のひとつは、神殿に参入する資格を得ることです。私は以前、監督として、またステークス部長会の一員として、神殿の祝福を受ける準備をしている多くの教会員と面接する機会にあずかりました。

時折、人々は依然として過去の問題にとらわれているため、「あなたは神殿に参入するのにふさわしいと思えますか」という質問に答えるのをためらうことがあります。

兄弟姉妹が過去の問題で苦しんでいるのを感じるたびに、私は次のようなヒュー・B・ブラウン副管長の言葉を思い起こします。「あなたの過去がどのようなものであれ、あなたの将来には一点の染みもありません。」

(「インブルーズメント・エラ」1969年12月号, p.95)
また、何年も前にある賢明なステークス部長から与えられた助言を思い出します。彼はこのように言いました。「過去を振り返ることにあまりに多くの時間を費やしてはいけません。あなたが過去に犯した過ちにばかりとらわれていると、それがいつか、あなたの将来を押しつぶしてしまうでしょう。」

過去の過ちにとらわれる

過去を振り返ることは、何のためにそうするのかを理解しているならば、間違いではありません。主は私たちに過ちから学んでほしいと望んでいらっしゃいます。

しかし、その経験が私たちの人生にとってどのような意味を持つのかを正しく理解し、いつまでもとらわれない場合のみ、私たちはそこから学ぶことができます。過去の過ちにいつまでもとらわれていると、

失意という深い穴に落ちてしまいます。これは特に、罪を犯した場合に言えます。

以前、教会の宗紀評議会に出席した時、ある兄弟がこのように語りました。「かつて私はこの恐ろしい罪を犯しました。そして、天国へ行けるチャンスはもうなくなつたと知つたのです。」彼は暗闇の中で道に迷いました。ひとつの罪が永遠の栄光を得る機会を永久に奪ってしまったという間違つた考えを抱いたのです。この人は、イエス・キリストは私たちの罪のために死に、罪を贖つてくださったことをもっとよく理解する必要がありました。主の贖いのおかげで、私たちは悔い改めて、過去の罪を克服することができるのです。

自分を過度に責める

また私たちは、自分が犯していない罪に対してまで自分を責めてしまい、失望することがあります。たとえば、虐待を受けた人々は、自分が受けた虐待に対して何らかの責任が自分にあるのではないかと感じるがよくあります。さらに、虐待を受けながらも生きてきたことに罪悪感を覚えることさえあります。

昔、戦争中に、3人の若者が敵の攻撃を受けたことがありました。ひとりには軽傷で済みましたが、ひとりには致命的な重傷を負い、もうひとりには死亡しました。3人の中で最も傷が軽かった人は、何年もの間、なぜ自分だけ助かったのかと苦しみました。そして、あれこれ考えた末、生き残つたことで自分は何か悪いことをしてしまったのだと確信するようになりました。そして彼の罪悪感には彼を破滅させるところまで追いやりました。

それから40年後、彼の息子が戦争で重傷を負って家に帰って来ました。その時初めて、父親は自分が先の戦争で生き残った経験を受け入れ、感謝したのです。彼は生き残ったために、苦しみを味わってきました。しかしそれは、息子がこれから経験していくのと同じ苦痛なのです。おかげで息子の気持ちを理解し、力になりました。

彼はこのような特別な方法で息子のために働き、ついに平安を見いだしました。彼はこう語っています。「私はこれまでずっと、前を見ずに後ろばかり見てきたことが残念でなりません。」つまり彼は、自分の力では及ばない事柄について、自分を責めてきたわけです。そして、いつも自分を責めていたために、ほんとうはもっと楽しめるはずの人生を楽しめなくなっていました。でも今は、彼にとって過去は祝福となり、彼の息子にとっては助けとなったのです。

同様に、他人の罪のために犠牲となった人々も、自分を責め、過去にこだわっているなら、いつまでも犠牲者のままでとどまります。悲しみを乗り越えるために主の助けを求め、自分の苦痛を祝福に変えるときに、癒しもたらされます。

結果を恐れる

時折、罪の告白に続く結果を恐れるあまり、過去にとらわれて生活することがあります。

私は以前、10代のころに犯した重大な罪について悩み続けてきた年輩の姉妹に助言を与えたことがあります。彼女は過去の過ちについて考えるたびに、心の中で泣いていました。

私はなぜ彼女が、次のような主の勧告を心に留めないのだろうかと考えました。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ、その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約58：43)

彼女は私にこう言いました。「どうしても罪を告白する勇気がなかったのです。とうとう、後ろを振り返ることに疲れ、前に進むことができなくなってしまいました。近ごろでは、もう死ぬまで心を清めることはできないのではないかと考えてきました。」

彼女のことを考えると、胸が痛みました。彼女はとっくの昔に罪を捨てていました。しかし、告白していないために、赦されたと感じる喜びを知らずにいたのです。また、過去を忘れることができずにいたのです。告白の後、彼女は平安に暮らすことができました。後年私は、

彼女の葬儀に出席することになりました。この時、彼女が最終的に過去を振り返るのをやめられたことに感謝の念を覚えました。時は心の傷を癒してくれますが、それは正しい段階を踏んだときだけなのです。恐れは一生続く悲しみと苦しみをもたらすことがあります。そこからほんとうに解放されるには、悔い改めるしか方法はありません。

悔い改めの賜を受け入れる

私たちが悲しみや苦しみを克服できるように、天父は私たちのために贖罪を用意してくださいました。

以前、20年も音さたのなかった友人と話していると、彼は少年のころ一緒に過ごした学校時代の出来事に触れました。覚えてるかい、と聞かれ、私は覚えていないと答えました。

「だれかほかの人と間違えてるんじゃない？」

「とんでもない。ほくたちふたりとも一緒だったじゃないか。」そう彼は言い張りました。

後で、私はその時の会話を兄に話し、旧友が身に覚えのないことについて私を責めた時の困惑した気持ちを伝えました。

すると、兄は笑いながらこう言いました。「悪いんだけどね、確かにそれはおまえのことだよ。ほくはその事件をよく覚えてるからね。」

私の心は重くなりました。数日間、そのことを考えていました。そのような恥ずかしい経験をしたのに、どうして忘れるなんてことがあるだろうか。そんな折、モルモン経を読んでいて、アルマが悔い改めた時に苦しみからすっかり解放された様子を記した聖句が目にとまりました。その後、アルマは「再び自分の罪を思い出して苦しむこともなかった」のです。(アルマ36：19) 私はこの聖句を読んで、自分が悔い改めた時、それまで感じていた苦しみからすっかり解放されてしまったので、その経験を忘れてしまったのだと気づきました。

もちろん、私たちは悔い改めたときに、すべての罪を忘れてしまうわけではありませんし、また忘れるべきでもありません。過去の経験を覚えておくことは、将来間違いを犯すのを防いでくれます。けれども、罪を覚えているからといって、くよくよ悩む必要はありません。過去の罪悪感や絶望感を何度も掘り起こす必要はないのです。そうすれば私たちもアルマのように、祝福を受けて「再び自分の罪〔に〕苦しむこと」(アルマ36：19、下線付加)がなくなるでしょう。

贖罪しよくざいという祝福を心に留め、キリストとその犠牲に
対する証あかしを強めることにより、私たちは完全な悔い改め
へと導かれます。また、そうすることによって、苦痛が
平安に変わり、どのようにして、いつ、過去を振り返る
のが適切かを見極められるようになります。

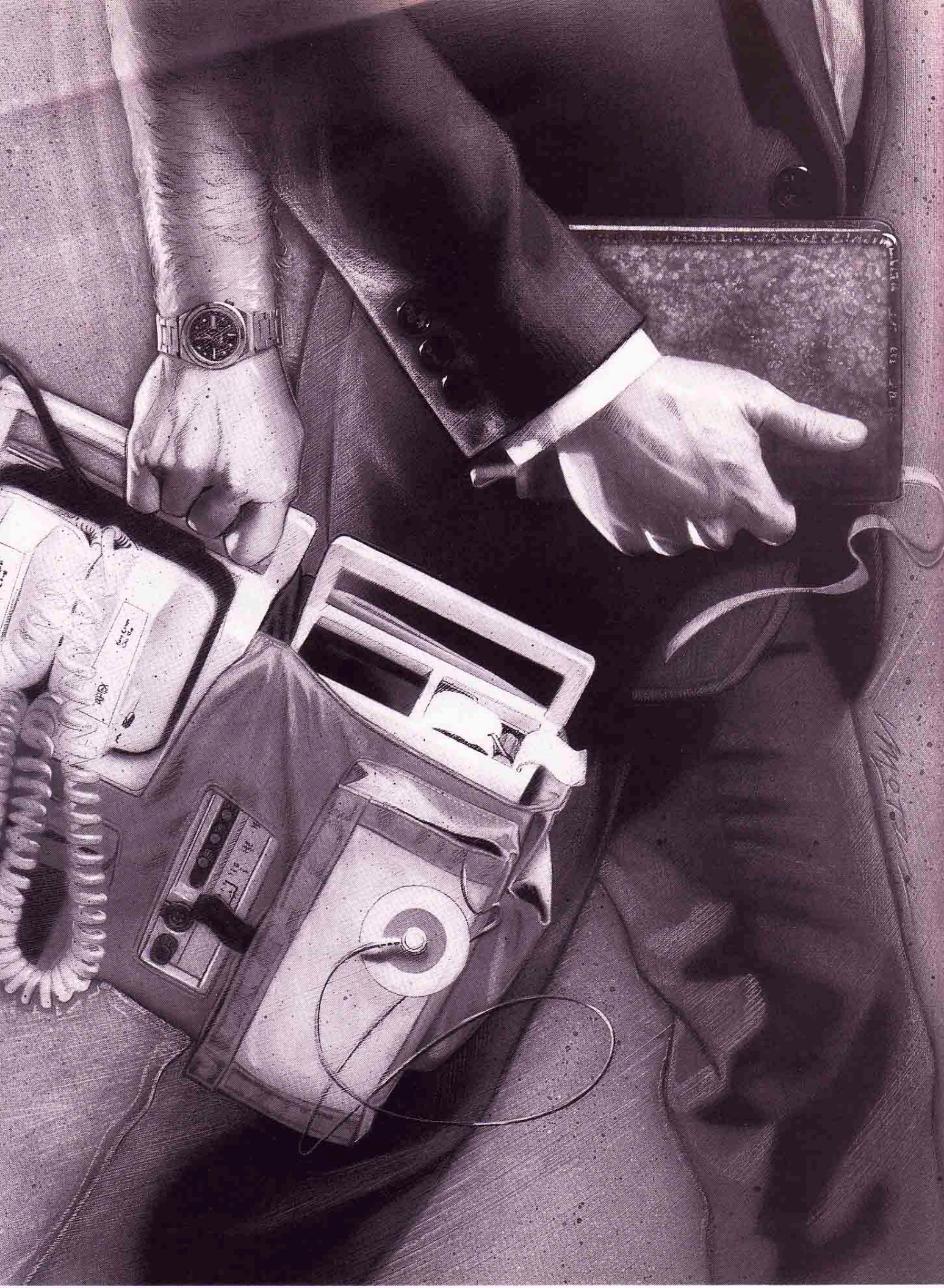
以前、ある母親が、困難な決定に直面して混乱してい
る子供に助言した時の話を聞きました。子供はこう尋ね
ました。「何をしたらいいか、どうやってわかるの。」そ

れに対する母親の答えは、私たちが人生で行なわなくて
はならない大部分の選択に当てはまります。彼女は子供
にこう言ったのです。「光の方に目を向けなさい。」

それに私はこう付け加えたいと思います。「そして、
後ろを振り返ってはなりません。過去のことは過去のこ
とです。イエス・キリストが私たち一人一人に新たな輝
かしい未来を与えてくださったことを喜びなさい。」□

ある父親は、戦争でひとり
の友人が戦死し、もうひとり
が重傷を負ったにもかかわらず、自分だけ無事だ
ったことに罪悪感を抱いてい
た。しかし、息子が別の戦
争から帰って来た時に初め
て、過去を振り返るのをや
め、平安を見いだした。





心の傷を癒す^{いや}

ポール・B・サーグッド

救急車がけたたましいサイレンを響かせて走り去るたびに、私はいつもぞくぞくしたものです。救急車のハンドルを握って病気やけがで苦しむ人の所へ駆けつけることにどれほどあこがれたことでしょうか。成長するにつれて、私はだんだんとこの夢に近づいていきました。学校では応急処置法、人間科学などを学び、最後に救急救命士訓練課程を修めました。

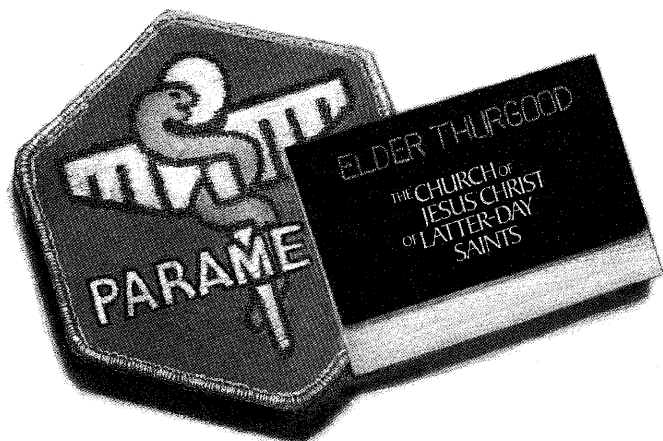
そして高校を卒業すると同時に、補助救急隊員として救急車派遣会社に就職しました。応急処置に関する私の知識はどんどん深まりました。私は人生についても多くのことを学びました。それは、普通の人が年を取って初めてわかるようなことです。しかし、以前には経験したことのない試みや誘惑にも数多く遭いました。

私の職場はまったく教会的でない雰囲気だったのです。教会の指導者が遠ざけるようにとよく言っていた環境です。でも当時の私には、それほど心配する必要はないように思えました。やがて仕事のために教会に集うのがむずかしくなってきました。私はこのままでいいのだろうか、これから先どうなるのだろうかとたびたび自問し悩むようになりました。その一方で、医療面での自分の熟達ぶりを感じ、夢に向かって突き進む私の前に立ちほだかるものは何もないとも考えていました。19歳の誕生日

を迎えた日にはカリフォルニアに行き、救急隊員訓練プログラムの受講を申し込みました。受講が許可され、秋期からの授業に出られることになっていました。自分がほんとうにしたいことをしているという充実感がありました。

「ところで伝道はどうでしょうか。」突然気になりだしました。もちろん行くつもりでした。以前から友達や家族にも、将来伝道に出ると言ってきたのです。雇い主にさえも伝道に出る予定があると話してありました。でも当時の私は、伝道がさほど大切なことに思えなくなっていました。自分を満足させることにしか興味を覚えなくなっていたのです。霊的成長の機会を逃してしまうことなど、もうどうでもよかったのです。「すべての若人は伝道に出るべきである」という予言者の言葉は依然として耳から離れませんでした。しかし、伝道のことを考えるたびに、2年もあったらどれほどりっぱな救急隊員になれるだろうという思いがわいてくるのでした。

どうしたらよいのでしょうか。伝道に出るのが正しいことだとは心底わかっているのですが、今の私は自分のことしか考えられません。伝道に出るべきか否か、いつもそのことが頭を離れません。朝目が覚めて夜眠るまで四六時中、悩んでいました。勤務体制が24時間交替だった



ので、考える時間はいくらでもありました。

そんなある晩のことです。寢床に就くとすぐに電話が鳴りました。それはハイウエーパトロール隊からのもので、高速道路で事故が発生したので至急出動してほしいという内容でした。私はすぐにその場に到着しました。小型乗用車が、さくを作るための木材を積載したトレーラーに追突してしまっただけです。ぐちゃぐちゃに押しつぶされた車の中には若い夫婦が乗っていました。結婚して間もないということでした。運転していたご主人の方は即死で奥さんの方は重傷でした。息も絶え絶えな19歳のその美しい女性の命を助けるために、私たちは必死で救急処置を施しました。私はこう自分に問いかけました。なぜこのすてきな夫婦が、このような悲惨な目に遭わなくてはならないのだろう。彼らの将来の計画も幸福も、すべてが消えてしまったのです。

高度な訓練を受けた医師と看護婦の待つ病院に急いで運び込むと間もなく、ヘリコプターが到着しました。ソルトレークシティにある病院に運んで、頭部の重傷に集中治療を施すためです。

事故のショックから立ち直ったところで私はハイウエーパトロール隊の人に話しかけました。彼は近親者に事故のことを知らせる任務を受けていました。その沈痛な表情を私は今も忘れられません。車で現場を去ろうとする彼の目には涙が浮かんでいました。こう感じました。なんと残酷な任務だろう。もし通告を受けるのが私の両親だったらどうしていただろう。すると別の考えが頭をよぎりました。私はどんな顔をして、現世での時をどのように過ごしたかを救い主に報告するのだろうか。

霧が出て、辺りが冷え込んできました。暗闇の中で顔を上げると、夜空は穏やかに澄み渡っていました。とめどなく涙がほおを伝って、気がつくとはあの女性の命を助けてくださるようにと主に祈り求めていました。そ

の瞬間、私の心は愛と憐れみで満たされ、ようやく理解の目が開かれたのです。医師や看護婦、救急隊員という職業は確かにrippな仕事です。でも彼らが癒せるのは肉体だけで、心の奥の深い傷までは癒せません。そのような傷は私たちが天父のみもとに帰ることを妨げます。そのような傷を癒せるのはただおひとりしかおられませんが、そのお方の助け手となる機会を私はみずから拒んでいたのです。私は決意しました。私たちを癒してくださる主のみ業を押し進めるために自分にできるかぎりのことをしよう、伝道に出よう、と。

時が流れ、あの事故から1カ月たった時、私の祈りがこたえられたことを知りました。あの若い女性が完全に快復して退院することになったのです。祈りにこたえてくださった永遠の父なる神にどれだけ感謝したことでしょう。今度は私が伝道に出て約束を果たす番です。

よく祈り、備えをするにつれ、自分は宣教師として天父に仕えるべきであると聖霊を通して確信するようになりました。ステーク部の祝福師が語ってくださる祝福の言葉を聞きながら感じたあの穏やかでやさしい気持ちを私は決して忘れないでしょう。神の予言者からの手紙を開けて、ペンシルベニア・ハリスバーグ伝道部で働くようにとの言葉を読んだ時にも同じ気持ちを感じたことを私は生涯忘れないでしょう。そしてペンシルベニアでの伝道中、イエス・キリストの代理人として働けることに穏やかで特別な気持ちを感じることができ、自分の選びはやはり正しかったのだと知りました。

伝道に出る前は、人が自分の助けによってもう一度歩けるようになること以上の喜びはないと考えていました。でもその考えは間違っていました。イエス・キリストの福音によってのみもたらされる真の喜びと幸福の道を人人が見いだす仲立ちとなること、それに勝る喜びはこの世にないとわかったからです。□

「奉仕、喜び……」

(賛美歌74番参照)

「主は私の働きから生じた結果によって私を非常に喜ばせたもう。」(アルマ36：25)

私たちは「主からますます豊にその『みたま』を賜るよう」(モーサヤ18：10) パプテスマを通して神に仕えることを誓約する、とアルマは教えています。「みたま」を賜わった結果としていただくもののひとつは、喜びです。インガ・ブリット・セーデルストロム姉妹もみずからの役割をこつこつと果たしながら、この喜びを得ています。彼女は北極圏南部に当たる、スウェーデンのシェルレフテオに住んでいます。もう70歳になりますが、身長は1メートル6センチしかなく、車いすの生活を送り、現在、肉体的には以前のように奉仕することができません。それでも、宣教師や求道者を家に招いたり、支部の会員たちに証を述べたり、悩んでいる人たちを慰めたりして、自分にできるかぎりのことをしています。(「チャーチニューズ」1994年4月16日付参照) 彼女はまさに奉仕を通してより大きな喜びを見いだしているのです。

救い主、私たちの模範

救い主が地上で人々に恵みと導きを施された時、そのみ業のほとんどは、周囲の人々を教え、一人一人を助けることでした。私たちが小さくささやかな愛のこもった行為を通して、隣人一人一人に仕えることにより、み業に貢献することができます。そして、たいの場合、私たちの奉仕を最も身近で必要としているのは、私たちの家族です。ハロルド・B・リー大管長は、私たちが行なうべき主のみ業の中で最も重要なことは「[私たち]の家の囲いの中」にあると述べています。(パンフレット「堅固な家庭」p.7)



ILLUSTRATED BY DILLEEN MARSH

また、救い主も私たちの助けを必要とする人々がどのような人々であるかを明らかにしておられます。それは「孤児や、やもめ」(ヤコブの手紙1：27)であり、信仰の弱さと闘っている人々、体力の衰えや病氣、失望などにさいなまれている人々です。主は私たちに「弱きを助け、垂れたる腕を挙げ、かよわきひびぎを強うすべし」(教義と聖約81：5)と勧告しておられます。

喜びはキリストのような奉仕から生まれる

心からの思いやりは、愛情深い行為やキリストのような奉仕を通して示されます。私たちの社会では、そのような思いやりによって、個人とその家族の双方が祝福を受けているのです。たとえば、扶助協会では人々に読み書きを教えるプログラムを行なっています。サンフランシスコで、放課後の子供たちに勉強を教えているトンガの姉妹たちも、そのようなグループのひとつです。彼女たちの得る報酬は、生徒たち

が自信をつけ、技能や知識を習得し、生活を向上させる姿を見るときに得られる「非常に大きな喜び」です。

ベス・トレシー姉妹は、カリフォルニア州ロサンゼルスステーク部の初等協会に奉仕する召しを、不安な気持ちで受けました。改宗者の彼女は、初等協会に出席したことがなく、これまでの責任はほとんどが成人を対象としたものでした。トレシー姉妹はこう思いました。「私は子供たちに何を与えられるだろうか。」しかし、託児クラスで代理教師を務めたり、自分と同様に力不足を感じているほかの初等協会の指導者を励ましたり、さまざまな国籍の子供たちを愛することを学んだりするうちに、満足感と喜びを見いだしました。それこそ、同胞に対するキリストのような奉仕の結果なのです。(モーサヤ2：17参照)

ゴードン・B・ヒンクレー副管長は、よい行ないに対して受ける喜びとはどのようなものかを、次のように説明しています。「国、町を問わず、またどのような家庭でどのような生活をしているかにかかわらず、ほかの人に関心を向け、手を差し伸べる機会はどこにでもあります。心に喜びを持ち、主のみたまがともにある生活をしたと思うなら、己を捨て、ほかの人に手を差し伸べようではありませんか。……自分自身のことを後にして、人に奉仕しましょう。」(「聖徒の道」1983年2月号, pp.7-8)

●奉仕をすることは、私たちが利己心を克服するうえでどのように役立つでしょうか。

●私たちはどうすれば「弱きを助け、垂れたる腕を挙げ、かよわきひびぎを強くすることができるでしょうか。□



十二使徒定員会会員

ロバート・D・ヘイルズ長老

名誉の帰還

ラリー・ガント



「長老定員会会長になる召しを受け入れてくださいますか。」表面上、この要請はいたって簡単でした。しかし、当時、ハーバード大学の大学院生として経営管理学の修士課程で学んでいたロバート・D・ヘイルズにとって、返事は容易ではありませんでした。ロバートは心の中ではその召しを快く受け入れましたが、教授たちが大学院の勉強の厳しさを考慮して、学生の学外活動に反対していることも承知していました。彼はまた、この件について妻のメアリーと話す必要があることもわかっていました。

ヘイルズ家族はふたりの幼い子供とともに、アパートに住んでいました。この召しについて話し合ったロバートとメアリーは、修士課程で学び続けながら長老定員会会長として奉仕することは、ロバートにとってきわめて困難であることがわかりました。しかしよく祈って話し合った後、メアリーはこう言いました。「ハーバードの修士号を持っている人よりも、活発な神権者の方がいいわ。でも、両方を兼ね備えた人になりましょうよ。」翌日、ロバートが学校から帰ってみると、メアリーがアパートの地下の一部を仕切って部屋を作っていました。この小さなオフィスは、ロバートの勉強部屋となり、またふたりが主のために働くときに用いる場所ともなりました。

「私はあの決断を下した時、すべてを主のみ手にゆだ

左——1994年4月に使徒に聖任されたロバート・D・ヘイルズ長老。上——高校3年生当時。

ねました」と、およそ40年たった今、ヘイルズ長老は語ります。「あの時の決断は、後年、自分の仕事を辞めて十二使徒定員会補助として働くようにとの召しを受け入れた時の決断よりも、もっと厳しいものでした。ある人々には理解しがたいことかもしれませんが、皆さんが若人としてたびたびむずかしい決断を下すとき、それは自分がどのような人物であり、どのような人物になろうとしているかを、実際に主に示すものであると、私は信じています。」

その決断には、ヘイルズ長老と姉妹がこれまでの生涯とともに従ってきた、ひとつの生き方がよく表われています。ふたりはひとつのチームとして、家族生活と教会での奉仕、そして仕事とのバランスを取るよう努めてきました。この決断には、ロバート・D・ヘイルズの生き方を際立たせている誠実さと正しいことを選ぶ道義心という特質もよく表われています。ヘイルズ長老は、この誠実さと道義心、またほかの多くの長所を備えた人物として、十二使徒定員会の新たな会員となり、1994年2月のマービン・J・アシュトン長老の死去に伴って生じた十二使徒定員会の空席を埋めたのです。

大きな影響を受けた少年時代

1932年8月24日にニューヨーク市で生まれたロバート（友人や家族からはボブと呼ばれていた）は、彼の生き方に大きな影響を与えた幼年時代をととても楽しく過ごしました。J・ルーロン・ヘイルズとベラ・マリー・ホルブルック・ヘイルズの間生まれた3人の子供の末っ子



ニューヨークに住んでいた幼年時代。左——白い服を着ているのがロバート。両親、兄、姉とともに。右——幼年時代。下——高校野球の投手をしていたころ。

であったロバートは、アイダホやユタにある両親の故郷から遠く離れた、ニューヨーク州ロングアイランドで幸せな幼年時代を過ごしました。ヘイルズ家の木の生い茂った広い庭には、ワイルドリリーやジャックインザブルピットの花が咲き乱れており、ロバートはそこで、姉のジャネットや兄のジェラルドとよく遊んだものです。商業美術家の父はよく子供たちに、家の敷地に岩で庭園を築いたり、池を掘ったりするのを手伝わせました。

ルーロン・ヘイルズの出身地は、アイダホ州レックスバーグです。短距離用の競走馬を持っていた彼の祖父は、ブリガム・ヤング大管長からレックスバーグに派遣されて、かんがい灌漑用水路を掘る事業を手伝いました。「最後の馬が死んだという彼の日記の記録を読むと、私はいつも心を動かされます」と、ヘイルズ長老は語ります。「彼は馬の名を書き連ね、こう記しています。『これらの馬たちは、本来の仕事ではない作業で主によく仕えた。』」

ベラ・ホルブルックは、自分の祖父が住んでいたユタ州バウンテフルで育ちました。バウンテフル・タバナクルの屋根が暴風で吹き飛ばされた時、(自宅を建築中であった)祖父のホルブルック兄弟は、タバナクルの屋根の張り替え用にと自分の建築資材をすべて差し出しました。

ヘイルズ家の子供たちは合衆国の東部と西部からそれぞれ最善のものを与えられました。ヘイルズ長

老の姉ジャネット・ヘイルズ・クラークは、その思い出をこう語っています。「毎年夏になると、母は私たち3人を、バウンテフルの祖父母の所へ連れて行ってくれました。そこでは、いとこたちと兄弟のようにして過ごしました。」

ロバートは、ユタ州スカルバレーの牧場でも、2度の夏をいとこたちと過ごしています。「干し草を積んだり、馬に乗ったり、夏の間山にいる家畜になめさせる塩を運んだり、また羊や牛の世話をしたりしました。すばらしい日々でした。」

ニューヨーク市で、ロバートは、ほかにも彼の教養の幅を広げる特別な経験をたくさんしました。たとえば、国連本部が彼の高校の近くにありました。「国連代表の子供たちから、ほかの国々のことについて実に多くのことを学びました」と、ヘイルズ長老は語ります。「私はそのころから、生涯を通じて国際的な経験を積んでいこうと決心していました。」

ロバートは子供のころ、野球に夢中でした。高校1年生になるまで、学校代表の野球チームで先発投手を務めていました。また、ユタ大学でも野球チームに所属しましたが、やがて、けがのために野球を続けることがむずかしくなりました。しかし、野球をしていた何年もの間に人生や人々について学んだ数々の教訓は、彼に大きな影響を及ぼしたのでした。



真実のパートナーシップ

高校時代のある時期、ロバートのピッチングの不調が原因で、チームは3度続けて1対0で負けてしまいました。学校新聞の見出しは「不運なヘイルズ、連敗」でした。彼はユニホームを持ってコーチの所へ行き、辞める意志を伝えようとしていました。コーチの部屋に入ると、コーチは言いました。「どうして負けているのかわかるかい。ゲーム前のウォーミングアップの時、君は速球とカーブをみんなに印象づけようとしているだろう。だから終盤に腕が疲れてくるんだ。それじゃ2回か3回しかもたないよ。見せびらかすのをやめなさい。そうすれば腕は疲れないから。」ロバートはその忠告に耳を傾け、次の試合では完封しました。「何でも必要なことを言ってくれるコーチを大切にしなければならない訳は、ここにありますが」と、ヘイルズ長老は語ります。「コーチの忠告に耳を傾ければ間違いを繰り返さなくて済み、目標を達成するよりよい機会が得られます。主もそのようなお方です。私は、主や主の聖任された者から受ける訓練を嫌がったりはしません。」

ヘイルズ家族にとって、福音こそが家族生活の基であり、彼らは家からおよそ30キロも離れたクイーンズワード部に集っていました。ルーロンもベラも、生涯を通じて教会の多くの召しを忠実に果たしました。

ロバートが子供の時に学んだ最も大切な教訓の多くは、両親の模範と、クイーンズワード部でのさまざまな経験から得たものでした。執事定員会会長であったロバートは、監督とのある経験から、神権指導者を敬うことを学びました。当時ワード部は、市民会館で集会を行っていました。聖餐を祝福するテーブルはステージ前のメインフロアに置かれていました。執事はいつも、聖餐トレイを受け取ると、ステージに上がってトレイを渡し、それから走ってステージから跳び降りて、別のトレイを受け取り、トレイをすべて渡し終えるまでこれを繰り返すのでした。ヘイルズ長老はこう語ります。「私がステージから跳び降りようとした時、新任の監督がそこに立っていました。そして、空中にいる私を捕まえて言いました。『そう、ほかのみんなはそうしている。』そして言いました。『でも、君は執事定員会の会長だ。』監督は私に、聖餐を適切に、敬虔に扱ってほしいと言いました。私が大切な教訓を学び始めたのはその時からです。時間を割いて私を教えてくださいました神権指導者のかたがたに心から感謝しています。」

大学2年生のロバートが、同じく大学生であったメアリーと出会ったのは、クイーンズワード部でのことでした。メアリーの家族は、ロサンゼルスからニューヨークへ引っ越して来たばかりでした。「彼女と出会ってからは、ほかのだれともデートしませんでした。私たちは最初の2カ月、仕事を終えると、毎晩一緒にお互いの家族の用事をしました。彼女は私が車を洗うのを手伝い、私は彼女が弟たちの子守りをするのを助けました。私たちは決して離れることがないかのようでした。」夏が終わると、彼らはふたりとも、ユタ州の大学に戻りました。ロバートはユタ大学に、メアリーはブリガム・ヤング大学に戻ったのです。翌年の夏、1953年6月10日、ふたりはソルトレーク神殿で結婚しました。

新婚のロバートは大学4年生の学業を続ける傍ら、カメラマン兼フィルム編集者としてソルトレークシティのテレビ局でも働きました。「時折メアリーがサンドイッチを持って局に来てくれました。編集をしてコマercialを組み込む作業のために映画を見るのですが、彼女もよくそばに腰掛けて見ていました。」

「私たちはいつも一緒に楽しい時間を過ごしました」と、ヘイルズ姉妹も語ります。「ボブはとてもユーモアのセンスがありますし、よく気配りしてくれます。」

ロバートは、1954年に通信ビジネスの学位を取得してユタ大学を卒業し、間もなく、米国防空軍に勤務しました。1955年に、ロバートとメアリーは、生まれたばかりの息子スチーブンを連れて、フロリダへ引っ越しました。これがその後何度も続く引っ越しの始まりでした。ロバートは4年間、合衆国戦略・戦術空軍でF84戦闘機とF100戦闘機に乗りました。1958年には、次男デビッドが家族に加わりました。

ロバートは軍隊で勤務していた間に、ひとつの大切な原則を学びました。彼が所属していた飛行隊の各隊では、パイロットの士気を高めるためにひとつのモットーが決められていました。「私たちの隊のモットー（戦闘機の機体にも書かれていた）は『名誉の帰還』でした」と、ヘイルズ長老は語ります。「このモットーは、力を尽くして任務をみごと完了し、所属基地に名誉の帰還を遂げようという、私たちの決意をいつも思い出させてくれました。」このモットーは、個人としての生活においても、



上(左から)——結婚当日のロバートとメアリー。息子のデビッドとスチーブンがまだ幼かった時分のヘイルズ家族。ピアノを弾いて孫と遊ぶヘイルズ長老。下——ジェット戦闘機操縦士のころ。

職場においても、誠実さと高潔さの重要性を思い出させるのに役立ってきました。彼は父親として、ふたりの息子が伝道に旅立つ前に(スチーブンはイギリスに、デビッドはドイツに召された)それぞれを腕に抱き、「名誉の帰還を遂げなさい」とささやきました。ヘイルズ長老は今もなお、このモットーに従っています。

ロバートが空軍での任務を終えると、家族はマサチューセッツ州ケンブリッジに引っ越しました。彼はそこでハーバード大学に通い、1960年に経営管理学の修士号を取得しました。それからすぐに就職の道が開かれ、職業の面では、いくつかの全国規模の会社で要職に就きました。また仕事の関係で、ヘイルズ家族はイギリス、ドイツ、スペイン、また合衆国内のさまざまな地に引っ越しをしました。

「引っ越しは、子供たちにとってはつらいことだったでしょうね。」ヘイルズ長老はそう語ります。「世の中を見て回ることに教育的な価値がある、と子供たちが気づくまでは時間がかかりました。でも息子たちは大きくなってから、外国に住んだことはためになったと言ってくれました。」

引っ越しはメアリーにとってもチャレンジでしたが、彼女は独立心と不屈の精神でそれに対処しました。かつて家族が引っ越しをした時のことを、ヘイルズ長老はこう述懐しています。「私は彼女をドイツに連れて行き、フランクフルトにふたりの息子と彼女を残して、短期の仕事のためにベルリンへ飛ばなければなりません。メアリーは息子たちを学校に入れ、混み合うアウトバーンの周辺の道を覚え、また、ついにはドイツ語を話せる

ようにまでなりました。これは代表的な例で、彼女はいつも必要なことを成し遂げてきました。」

メアリーとロバートのチームワークは、多くの人に



とって模範となってきました。義理の娘スーザンにとっても同様です。「ふたりは完全なパートナーシップを築いています」と、彼女は語ります。「どの夫婦も、ふたりを結婚生活の手本とできるでしょう。ふたりの関係は100パーセント対等です。一方が他方を支配するということはありません。お互いの意見が尊重されるのです。」

ロバートとメアリーは結婚した最初のころに、ひとつのチームとして主に快く仕えることを決心しました。そしてこの決意のおかげで、ふたりは、生涯にわたって、実業界における国際的な経歴と、福音の原則に従って生活したいという望みとの間のバランスを維持することができたのです。

「かつて私が昇進することになった時、上司から『奥さんがいなければ今のあなたはなかったと思いますよ』と言われました。彼は、『メアリーは君にとって最大の強味です。それを忘れないように』とも言いました。私はそのことを決して忘れたことはありません。」

メアリーが私を引き止めたことは一度もありません。私たちは、『あなたが私を引き上げ、私もあなたを引き上げる。そして一緒に登っていこう』というクエーカーの金言に従っています。私たちが果たしてきた事柄の多くは、チームとしての関係がなければ成し遂げられなかったでしょう。私たちはいつもひとつのチームでしたし、これからもいつもそうあるつもりです。聖霊に耳を傾けることに次いで、妻の言葉に耳を傾けることは、私の人生に最も大きな影響を及ぼしてきました。」

思いやりをもって働く

ヘイルズ長老は、ビジネスで際立った経歴を維持しながら、ハーバード時代に長老定員会会長として奉仕するように召された時に定めた自身の方針に従って、どのような教会の召しであっても喜んでそれを受け入れてきました。これまで教会の多くの召しを受けて奉仕してきましたが、最も頻繁に与えられたのが、支部長や監督としての召しでした。仕事の関係でしばしば引越したため、ジョージア州オールバニ、マサチューセッツ州ウェストン（ボストンステーク部）、ドイツのフランクフルトで支部長、またウェストン、ウィルミートワード部（シカゴステーク部）、フランクフルトで監督を務めました。また、カリフォルニア州ダウニーで早朝セミナ

リーを教え、ボストンステーク部とロンドンステーク部では高等評議員会で奉仕し、ボストンステーク部のステーク部長会の一員としても働きました。後に、ミネソタ地区とルイジアナ地区で地区代表を務めました。

1975年、ロバートが重役会議に出席していた時、マリオン・G・ロムニー副管長から電話がかかっている旨を伝えるメモを秘書から受け取りました。重役会議を中座することはきわめて異例であったため、ロバートが会議を抜け出して電話を受けたのには、全員が驚きました。この時ロバートは、ロムニー副管長から、伝道部長として奉仕してほしいとの要請を受けました。やがて、イギリス・ロンドン伝道部を管理する割り当てを受けました。その後間もなく、ソルトレークシティからまた電話がかかってきました。今度は、スペンサー・W・キンボール大管長でした。大管長はロバートに、別の任務に就くことになってかまいませんか、と尋ねました。

ロバートはこう答えました。「差し支えございません。どこへでも私をお送りください、大管長。」

すると、キンボール大管長はこう言いました。「3年以上働くようにお願いしてもよろしいでしょうか。」

ロバートは、「けっこうです」と答えました。

次いでキンボール大管長は彼に、教会幹部として働くという終身の召しを伝えました。

「キンボール大管長は『あなたが伝道部長として働けなくて残念に思われるのは承知しています』とおっしゃいました。しかし大管長は『そのことについては思い煩わないでください。あなたには多くの使命がありますから』と続けておっしゃいました。」

十二使徒定員会補助として、また後に七十人として働いた最初の3年間に、ヘイルズ長老は大管長会のために27の地域大会の計画を手伝いました。「私はキンボール大管長や使徒たち、またそのほかの指導者たちと旅行するのが大好きでした。さまざまな土地を訪れて聖徒たちに福音の真実性を証する予言者、聖見者、啓示を受ける者を目にすることは、まったくすばらしい経験でした。」

伝道部長として奉仕するようにロムニー副管長から電話を受けた日からおよそ3年たったころ、ヘイルズ長老は、イギリス・ロンドン伝道部で働くようにという電話を、キンボール大管長から受けました。「私たちはイギリスの人々とイギリスという国、そしてそこの伝道部が大好きでした」と、ヘイルズ長老は語ります。

1979年に伝道部長としての務めが終わると、家族はそのままヨーロッパに引っ越しました。ヘイルズ長老はそこで地域担当教会幹部として、当時十二使徒定員会の一員であったトーマス・S・モンソン長老や、地区代表であったハンス・B・リンガー兄弟と一緒に働きました。彼らは当時まだ福音が確立されていなかった国々の指導者たちと密接な関係を築いていきました。東ドイツでは、神殿を建てることの可能性について指導者たちと話し合いました。しかし、教会の指導者が建築の要請をするたびに、「建築資材が得られない」という理由で拒否されました。そこで、建築資材が得られる所はどこか尋ねたところ、ついに「フライベルク」という返事がありました。それから間もなく、そこに神殿を建てる許可が得られたのです。

ヘイルズ長老は、かつてのチェコスロバキア、東ドイツ、ハンガリー、ポーランドに旅行した時に、政治紛争や軍事紛争に出くわしことが何度かありました。「よいときにも、悪いときにも」そこに居合わせたのです。ポーランドでは、ときには、戦車や催涙ガス、通りを駆け抜ける民衆を目の当たりにしながら、政府の指導者たちとの関係を築いていかなければならないこともありました。ワルシャワでの最初のバプテスマはホテルのプールで行なわれましたが、会員たちはついに集会所を建てることができました。

「私はこれらの国々の聖徒たちを心から愛し尊敬しています。忠実な彼らを愛しているのです。2,000人以上の人々が、今も自分の証を忠実に守っています。」

ヘイルズ長老が地域担当教会幹部を解任されると、家族でユタ州ソルトレークシティに戻りました。ヘイルズ長老は、1983年から1984年まで北アメリカ南西地域の地域会長を務め、1985年には管理監督として働くように召されました。ヘイルズ長老のおもな責任は、教会における外形的な儀式と実務を監督することでした。何年にも及ぶ教会での奉仕と会社役員としての経験を通して、彼はこの召しにじゅうぶんにふさわしい者となっていたのです。

「父は問題を分析し、解決策を練ることが実に上手です」と、息子のスチープンは語ります。「父には、人々を導いて物事を進める特別な才能があると思います。人々に、彼ら自身の問題を解決する責任と、なすべきことを遂行する力を与えます。そして問題が解決されると、

その人をたたえます。父は、自分は表に出ないで、物事が行なわれるように助けるのを生きがいとしています。

ある人々は弱い部分に焦点を当てて、それを切り離すように訓練を受けており、それで人々の人生をだめにしてしまうことがあります。しかし、概して父は、その弱い部分を取り替えるのではなく、その周囲を覆って強めようとします。父は人を愛しており、人のためにできることは何でもします。」

管理監督会でヘイルズ監督の副監督を務めた、七十人のヘンリー・B・アイリング長老も同意見です。「ヘイルズ長老は人を築き上げる人です。長年の間、ひそかに人を助けてきました。だれかが助けを必要としていることがわかれば、そのために何かをする人です。」

ヘイルズ長老は、娯楽としてスポーツを、特にゴルフを楽しみます。ヘイルズ長老とメアリーは、息子たちや義理の娘たち、また8人の孫と一緒に過ごすのを楽しみにしています。ヘイルズ夫妻はベア湖の近くに古い農家を持っており、息子夫婦や孫たちとときどき週末の休暇を過ごすようにしています。「私たちは孫たちと親密な時間を過ごすことの価値を知りました。私は孫たちを連れて、農場を訪ねたり、鳥の保護区やハイキング、運動会やスポーツの試合に行ったりします。メアリーは孫たちに本を読んであげるのが好きです。」

ヘイルズ長老は現在は健康ですが、かつて2度心臓発作に見舞われました。「私は毎日こうして生きていられることに感謝しています」と、長老は語ります。「私はすべての人に、また天地のすべての事柄に、感謝の気持ちを新たにしました。」（「聖徒の道」1994年7月号、p.113）

ほかの人々はヘイルズ長老のことをどのように見ているのでしょうか。「思いやりのある人です」と、義理の娘スーザンは語ります。「父は裁く人ではありません。赦し、そして忘れます。父は両親を敬っており、高い標準で自分を育ててくれたことについて両親にいつも感謝しています。標準を下げることなく、常に標準に従って生活しています。」

息子のスチープンはこう言っています。「父はほかの人々のプライバシーを尊重し、秘密を守る人です。正しい動機で正しいことを行なおうと心がけています。父は私にとっていつもよい模範です。」

「忍耐こそ、父の最大の特質です。父はとても忍耐強



左上——1979年に開かれた、フランスのパリ地域大会で。(左から) N・エルドン・タナー副管長、スペンサー・W・キンボール大管長、トーマス・S・モンソン長老、チャールズ・ディディエ長老。右上——1982年4月、ドイツ・ミュンヘン伝道部のニュールンベルクゾーン大会でのヘイルズ長老。(前列、右から3人目) 下——1993年。ケニアのソマリア難民キャンプを訪れたヘイルズ長老。(写真提供/ガリー・ポーター)

いのです」と、息子のデビッドの言葉です。「仕事上の取り引きも上手です。両方の立場に立って話す能力を備えており、何が問題で最終的に何を目指さなければならないかに相手の意識を常に集中させる能力も兼ね備えています。」

メアリーはこう語ります。「まったく偽りがなく、清い心を持ち、正しいことを行ないたいとひたすら願っています。」

「ヘイルズ長老は決して人を非難しません」と、同僚は言います。「人々に自分自身で解決させるというのが、彼の管理の方法です。また彼はいつも神権指導者を敬ってきました。大管長会が語る時、謙遜な僕として仕えています。」

「私は弟子のひとりです」

1994年4月7日の木曜日、ソルトレーク神殿において、エズラ・タフト・ベンソン大管長はゴードン・B・ヒンクレイ副管長ならびにトーマス・S・モンソン副管長とともに、ヘイルズ長老の使徒としての聖任と任命に加わりました。そこには、十二使徒定員会の会員が全員出席していました。

そして今ヘイルズ長老は、十二使徒定員会の一員としてキリストの特別な証し人の任にあります。戦闘機のパイロット時代にヘイルズ長老を鼓舞した「名誉の帰還」というモットーは、役員たちとともに重役会議室にしようと、子供たちとともに居間にしようと、ヘイルズ長老が生涯にわたって守り続けるひとつのテーマとなっています。教会の指導者として働くときも、

夫人とのきずなを強め合うひとときも、ヘイルズ長老はいつも名誉の帰還を遂げているのです。

「私たちは試しを受けるために地上に來ています」と、ヘイルズ長老は言います。「私たちは忠実に従い、終わりまで堪え忍ぶことによって、いつの日か、私たちの天父とその御子イエス・キリストのみもとに名誉の帰還をすることができるのです。私は時を無駄にせず、いつでも人々に証を宣べていきたいと思ひます。ニーファイ第三書第5章13節で言われているように、『私は神の御子イエス・キリストの弟子の一人であって、キリストの民に永遠の生命を得させるために、キリストの道を宣べ伝える役目をキリストから委ねられた者』なのです。」□



ドナウ河畔 のセミナー

マービン・K・ガードナー

PHOTOGRAPHY BY BRIAN K. KELLY AND
MARVIN K. GARDNER

皆さん、ドナウ川を知っていますか。ヨーロッパ中部から南東部を流れるあの有名な川です。きらきらと輝く青いリボンのようなドナウ川の土手沿いには美しい町々が広がっています。ドナウ川という名を聞くとそこで奏でられるバイオリンの音色を思い浮かべる人も多いのではないのでしょうか。しかし、ここ数十年間、この音色は



ドナウ河畔にあるハンガリーのドナウパロスからは消えていました。1949年まで、この町はドナペンテレという名で知られる小さな農村でした。その後、ソビエトの指導者イオシフ・スターリンが、この町を自分の理想とする共産主義の町に変えてしまいました。スターリンはこの町に「スターリンパロス」(「スターリンの町」の意)という

新しい名前を付け、全国から何千人という人々を移り住ませ、労働者の町に変えてしまったのです。そこには、長い煙突から黒煙を吐き出す巨大な工場が連なり、灰色のコンクリートでできたアパートが林立しました。ここは最大限の効率と実用性を考えて設計された町ですが、美しさには欠けていました。たとえば、スターリンのモデル

都市には教会がひとつも建築されていませんでした。宗教、出版、集会の自由は本質的に存在しないからです。こうしてどの世代の人たちも神と神の御子である贖い主の^{あがな}ことを知る機会を与えられませんでした。

ところが最近になって、ハンガリーで驚くべき変化が立て続けに起こりました。1987年、ラッセル・M・ネルソ





ン長老がこの国に使徒としての祝福を宣言しました。続いて1988年に教会が公式の承認を受け、1989年にハンガリーが民主主義国家となり、1990年には、ハンガリー・ブダペスト伝道部が創設されました。1991年、モルモン経のハンガリー語版が出版され、1993年にはハンガリー語で書かれた教会の最初の機関誌が発行されました。

劇的な出来事がハンガリー全土を覆い尽くしていく中で、あの「共産主義のモデル都市」にも特筆すべき変化が起きました。スターリンの死後、スターリンバロスの市民は、自分たちの町に、「ドナウバロス」（「ドナウ河畔の新都市」の意）というもうひとつの新しい名前を付けました。ここは今でも工業の中心地のひとつなのですが、民主主義の誕生とともに、希望の空気が漂っています。ドナウバロスの市民にとって、今享受している自由の味は格別に甘いようです。

ドナウバロスで末日聖徒のバプテスマが最初に行なわれたのは1989年のことでした。それから6年の短い年月の間に、数多くの改宗者が教会に加わりました。現在、会員数は230人となり、



支部はふたつになりました。そしてドナウバロスでも、福音のすばらしさを発見し、新たに^{たまもの}見いだした賜を喜び、それをほかの人と分かち合おうとする末日聖徒の青少年の歌声が響きわたるようになりました。

ジョセフの時代の聖徒のように

20歳になるザポー・アンドラスは初期の改宗者のうちのひとりです。（ハンガリー語では、姓が先に名が後にくる）1989年、15歳でバプテスマを受けたアンドラスは、現在、第2支部のセミナー教師を務めており、専任宣教師として伝道に出る準備をしています。

上——かつてスターリンの名を冠していた町で、セミナーの生徒たちと福音について語り合うバクスィー・カロリー支部長。左——最近改宗したばかりのペルガー・イルディコ。下——ホルバス・アティラは両親にバプテスマを施した。右ページ——フエア・マリア、ベレッキー・クリスティーナ、ボゾー・プリギッタはセミナーを通じて大の仲良しになった。



アンドラスが、今晚行なわれるセミナーの生徒を歓迎しています。一方、全部で13人いる生徒たちは、テーブルの周りに自分たちのいすを並べています。テーブルの上には、よく読み込まれた何冊ものモルモン経が所狭しと置いてあります。皆で『神の子です』を歌い、若い女性のひとりが開会の祈りを捧げます。

ドナウバロスの教会はまだ新しく、全員が最近の改宗者です。セミナーの生徒のうち、教会に入って2年になる人は7人、1年しかたっていない人は5人です。3人は家族で唯一の教会員です。また、家族を教会へと導いた人が4人もいます。

会員一人一人の生活は、それぞれ何らかの形で結びついています。自分のクラスメートが教会員で、その人から福音を紹介されてバプテスマを受けたという人も何人かいます。その結果、セミナーのテーブルの周りには、笑ったりからかったりする中にも、愛と一致の精神がみなぎっています。

このセミナーの生徒たちは、ジョセフ・スミスの時代に末日聖徒が享受したはずの精神と同じ精神を感じているのです。彼らは、福音の初々しさと美を感じ、みずからの力で真実の福音を見いだし、それをほかの人に語るという経験をしています。すばらしい何か、霊を高揚する何か、いずれは全地を覆うことになる何かはまだ始まったばかりの時に、自分も関与しているという気持ちを味わっているのです。

新たに見いだした贈り物

このセミナークラスには、年齢も

名前も同じふたりの若い女性がいます。16歳のブリギッタです。「クラスメートのセレス・ブリギッタから初めて教会のことを聞きました」とボゾー・ブリギッタは語ります。「聖餐会せいさんかいに出席するようになって友達がたくさんできました。そのため、ユースカンファレンスが開催されるという時、私も当然行くべきだと思いました。カンファレンスの最中に、初めて自分もこの教会に加わる必要があると感じました。そ



れから1週間して、私はバプテスマを受けました。」ブリギッタのバプテスマから2カ月たって、ブリギッタの母親と15歳になる弟ラズロがバプテスマを受けました。(父親は6年前に亡くなっています)「私たち3人、つまり家族全員がバプテスマを受けたのです。ほんとうにすてきなことです。」

「最初は友達だけがバプテスマを受けるかもしれないと思いました。」こうクラスメートのセレス・ブリギッタは語っています。「家族まで教会に入るなんて、驚きました。」

末日聖徒のクラスメートに招待されて聖餐会せいさんかいに出席したホルバス・アティラ(16歳)は、そこで見たことに感銘

を受けました。「友達から家族を中心とする教会だと聞き、ますます興味を持ちました。」何週間もたたないうちに、アティラはバプテスマを受けました。

3カ月後、彼の父親が宣教師から福音を学びたいと言ってきました。「そのころにはほくも教会のことをよくわかっていて、福音を学ぶ父の手助けができました。セミナーから得た知識のおかげで、父に聖典について説明することができました。しかしほくは、

たばことコーヒーが大好きな父がバプテスマを受けるなどという信仰は持ち合わせていませんでした。父が天父てんとうの助けを受けて、そのような嗜好品しこうひんを生活の中から遠ざけていく姿を目の当たりにして、ほくは自分の目を疑いました。2カ月後、ほくは父にバプテスマを施しました。

それからほくと父が教会に楽しく集うのを見て、母までが教会に興味を持ち始めました。父のバプテスマから3カ月後、今度は母にバプテスマを施すことができたのです。翌日、ほくたちは家族全員で教会に集いあかし、証あかしをしました。その時感じた気持ちは、言葉ではとても言い表わせません。」

互いに支え合う

福音に改宗したこれらの若人は、いつまでも堅固な信仰を持てるよう互いに助け合っています。去年の夏、クレイン・キング（19歳）ともうひとりの若い教会員は、家から遠く離れた町で就職しました。「周囲には、ひとりも教会員がいませんでした。たったふたりでこの世に放り出されたようでした。



そしてたくさんの試練に遭いました。夜帰宅するといつもふたりでともに祈り、一緒にモルモン経を読み、ドナウパロスの教会の友人たちから手紙が届くのを待ちました。おかげであの困難な時期を乗り越えることができました。」

パラトニ・ガボルとボルソス・ピーターはともに18歳ですが、このふたりも故郷を離れて仕事をしている時に、同じような経験をしました。「私たちの周りにいるのは、たばこを吸ったり、酒を飲んだり、下品な言葉を使ったりする人、またふさわしくない習慣に染まっている人ばかりでした。最初はとても大変でした。」ガボルはこう語っています。「しかしやがて、ふたりで毎日ともに祈れる場所を見つけたので

す。それは大きな助けになりました。」

ある日の午後、ベレッキー・クリスティーナ（16歳）はひとりで家にいました。「私は聖霊を感じることを、そしてこの教会が真実であると感じることが大好きです。でも、その日は聖霊を感じるできませんでした。聖霊を身近に感じる事ができず、寂しくてたまりませんでした。」クリスティーナは、教会の音楽を聞いたり、モルモン経を読んだり、祈ったりしましたが、どうも訳がなかなかに聖霊を感じられませんでした。

「私は、友達のセレス・ブリギッタに会いに行きました。」彼女はこう語っています。「一緒に散歩してくれるよう頼みました。歩きながら、イエス・キリストと天父のことについて話しました。知らない間に、私は自分の証を宣べていました。そして、彼女も自分の証を伝えてくれました。私たちは町中のベンチに2、3時間腰を下ろし、互いに証を分かち合いました。たくさんの人が行き交う中、ベンチに座って、私たちは、神が私たちをご覧になり、神について語り合っている私たちのことを誇りに思っておられるのを感じました。私は聖霊を感じ、自分の証が強められたことを知りました。それからはとても幸せな気持ちになりました。」

「だれも眠れませんでした」

短いハンガリーの教会史にあって、1993年の夏にブダペストで行なわれたユースカンファレンスは、大きな出来事のひとつです。200人近い教会の若人がハンガリー全土からやって来たの

です。タレントショーやスポーツ活動、講習会などが開かれましたが、何と書いてもいちばんのクライマックスは、4時間にわたる証会でした。

「その証会で聞いた証のすべてが、どれほどすばらしいものだったか伝えるのは至難の業です。」こうバルカイ・ニコレッタ（18歳）は語っています。「皆が泣きました。聖霊がその場におられました。この証会の後、夜になっても、だれも眠れませんでした。翌朝、だれも家に帰りがりませんでした。カンファレンスを終える閉会の祈りが捧げられましたが、私たちの心の中にはカンファレンスが終わってしまったことに対する大きな悲しみが残りました。しかし同時に私たちは幸せでした。お互いをとても身近に感じ、ドナウパロスに帰るバスの中、ずっとみんなで賛美歌を歌いました。歌っている間も、聖霊がともいらっしゃるのを感じました。」

セミナーの中でも、証を築き、一致を深める機会が定期的にあります。「セミナーは大切なプログラムだと思いますが、その理由はふたつあります。」ボルソス・イバ（16歳）はこう語っています。「まず第1に、セミナーに備えるには、定期的にモルモン経を読まなければなりません。これはとてもすばらしいことです。第2に、セミナーを通してともに活動する機会が与えられます。この支部の若い人たちは信仰があつく、お互いの間に深い絆があります。この点でもセミナープログラムに感謝しています。よく行なうことですが、お互いの証を分かち合うのは意義深い活動です。1週間ほど前にも、セミナーのクラス



上——福音のすばらしさを見いだしたハンガリーのセミナー生徒、ソモディ・スザンナ、バルカイ・ニコレッタ、クレイン・キング。下——ボルソス・イバは、熱心に福音をほかの人と分かち合っている。左ページ——20歳のザポー・アンドラスはセミナーの教師をしている。



あかしかい
で証会を開き、みたまを強く感じました。ユースカンファレンスで感じたのと同じ気持ちでした。この経験が私に大きな力をもたらしました。」

「神殿の屋根が取り払われ」

ほかにも重要な出来事として、1994年の4月と8月に、死者のバプテスマを受けるために行なわれた、ドイツのフライベルク神殿訪問があります。ハンガリー全土から集まった若人が、満席のバスに乗って、22時間の旅に出かけたのです。彼らはある使命を持って帰って来ました。つまり、ほかの人に自分たちの経験を伝え、その経験の貴さとすばらしさを皆で分かち合うことです。

「私は、自分が一体どんな人のためにバプテスマを受けているのか、その人がいつの時代に生きていた人なのかまったくわかりませんでした。」ソモディ・スザンナ（18歳）はこう語っています。「儀式が半分くらい終わったところで、何の前触れもなく、強いみたまを感じました。その人物が霊界で福音を受け入れ、だれかが自分の名前

でバプテスマの儀式を受けてくれるのをずっと待っていたのだと感じたのです。後にも先にも、あの時ほどすてきな気持ちを感じたことはありません。」

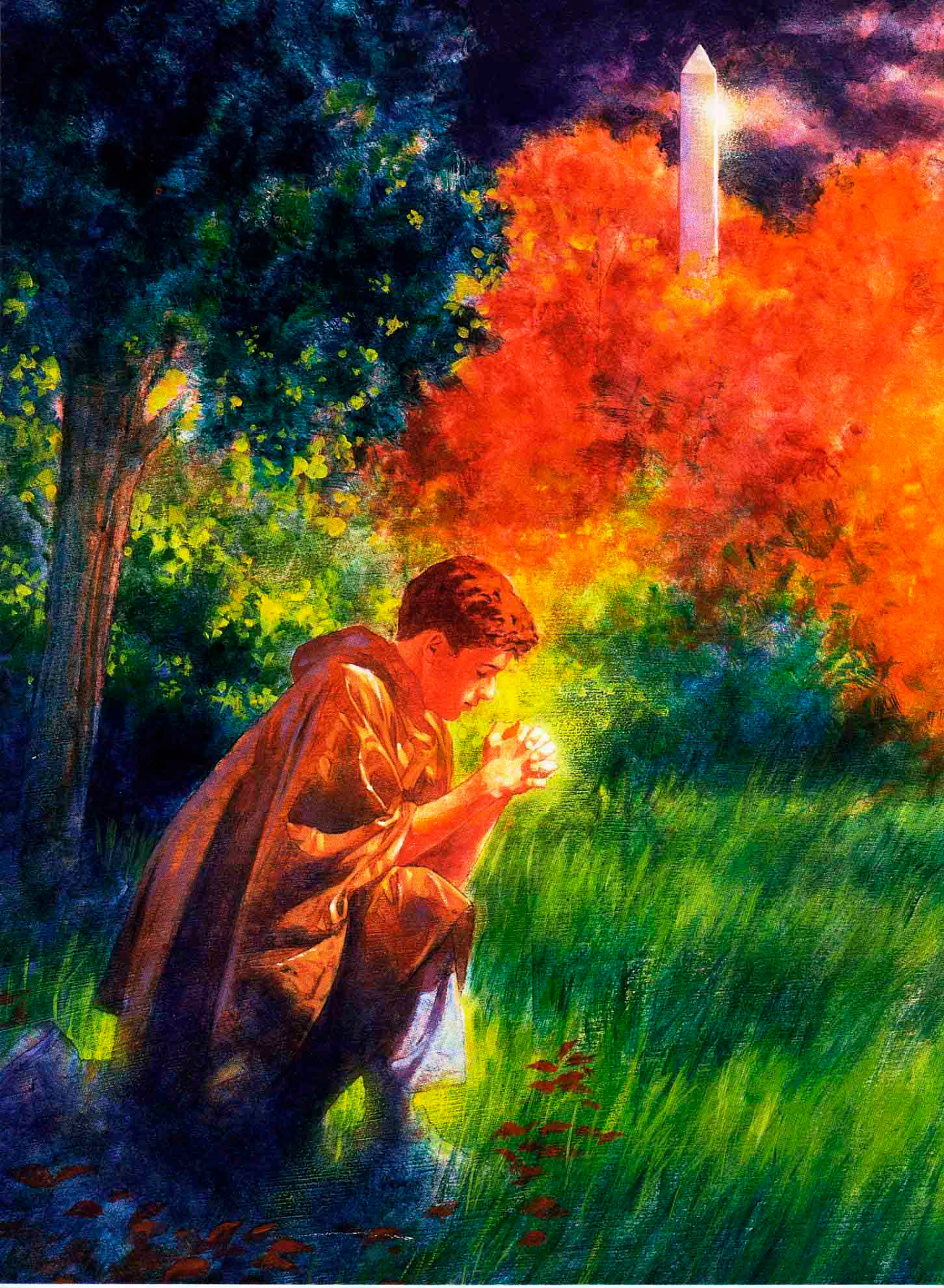
ボルソス・ピーター（18歳）はこう語っています。「私は神殿の中で特別な気持ちに包まれました。神殿の屋根が取り払われ、今いる所が天と直接つながっているように感じたのです。」

「天父の愛を知る」

美しいものを探究し、新たに見いだした賜^{たまもの}を喜び、ほかの人々と分かち合うのはすばらしいことです。

ベレッキー・クリスティーナは次のように語っています。「そして何よりすばらしいのは天父の愛を知ることです。」

ハンガリーのセミナーで学ぶ生徒たちは、そのような確信を胸に抱きながら、彼らの新しい歌を、ドナウ河畔の町ドナウバロスに響きわたらせています。□



やってみよう

デビッド・ハーサム

ジョセフ・スミス記念碑が、予言者の出生地であるバーモント州シャロンにあります。私たちは、記念碑の正面に広がるぬれた芝生に縮こまって座っていました。ポンチョで身をくるんでなんとか雨に当たらないように無駄な努力をしながら、雨の音にかき消されがちな指導者の声に耳をそばだてていました。やがて私たちは最後の活動として、森の中でしばしひとりで瞑想し、自己評価することになりました。

この活動は私にとってとても感動的なものとなりました。瞑想の時間の前に、ある指導者はデビッド・O・マッケイ大管長が祝福師の祝福を受けた時のことを、私たちと関連させて話してくれました。当時13歳のデビッドはビー玉のチャンピオンでした。祝福の後で祝福師はデビッドに、ビー玉遊びよりもっと大事なことがあると教えたそうです。私も、今こそ自分にとっての「ビー玉」、つまり子供っぽい重要でない事柄を捨てて、どのように人生を歩んでいくか決心すべき時だと感じました。そしてその決心ができるかどうかは、教会が真実であることをほんとうに知っているかどうかにかかっていた。そこで天父に尋ねてみることにしました。

森に入ると、世界が急に静まり返ったかのように感じました。雨にぬれないようにポンチョをまとった私は、人けのない場所を探しました。賛美歌を何曲か歌い、しばらく聖典を読みました。やがて用意ができたと感じられたので、ひざまずいて祈りました。

心の高まりを感じながら祈っていましたが、緊張してもしました。それまでもみたまを感じたことはありました。断食証会あかしかいに出席していた時にも、モルモン経について証を受けた時にも感じたのです。でも、「私は教会が真実であると知っています」と心から言うことはできませんでした。もし祈っても何の答えも受けられな

かったら、どうしたらよいのでしょうか。もし森のこの場所でひざまずき声を出して祈っても、ただ雨にぬれるばかりで何も起きなかったら。

しかし、私は「とにかくやってみよう」と決心しました。そこでびしょぬれの草の上にひざまずき、頭を下げて祈り始めました。だれかに聞かれるのではないかという恐れから、小声で話しかけました。そしてごく簡潔に、自分がほんとうに神のまことの教会に属しているのかどうかを知りたいと願いました。祈り終わるとひざまずいたまま、その答えを待ちました。

最初、私は教会が真実であることを、すで知っているという気持ちになりました。しかし、それは単に自分の感情によるものかもしれないと思ったので、再び祈り始めました。

「あなたはすでに知っている」という答えが再び返ってきました。この時、みたまによって、平安と喜びを伴った温かく穏やかな気持ちに包まれました。

胸の鼓動が早くなるとともに、思わず喜びで顔がほころびました。セミナーや個人での学習を通して、戒めに戒めを加え、自分が少しずつ証を築いてきたとわかったのです。ただそれがとてもゆっくりだったので、証を持っていることを認識できずにいたのです。

こうして私は教会に対する証をはっきりと持ったのです。これからは、自分の人生にあまり重要でないことは後回しにし、霊的成長を続けられることでしょう。教会が真実であることを個人的に知ることができ、とても平安で満ち足りた気持ちになり、神への感謝の念に満たされました。ひざまずいたまま、再び頭を垂れ、天父に感謝の祈りを捧げました。今まで気づかなかっただけで、自分はすでに証を持っていたことを、天父が知らせてくださったからです。□



救い主に従う

イエス・キリストは神の御子であり、救い主、贖い主です。イエスは贖いを通して私たちに永遠の生命を与え、天父のみもとに帰れるように道を備えてくださいました。また、イエスを模範とし、主を通して御父について学ぶよう招いていらっしゃいます。

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ17：3)

キリストと天父への信仰が増すに従って、さらに大きな喜びと達成感をもたらされます。□

DETAIL FROM CHRIST AND THE RICH YOUNG RULER,
BY HEINRICH HOFMANN

お返しとして

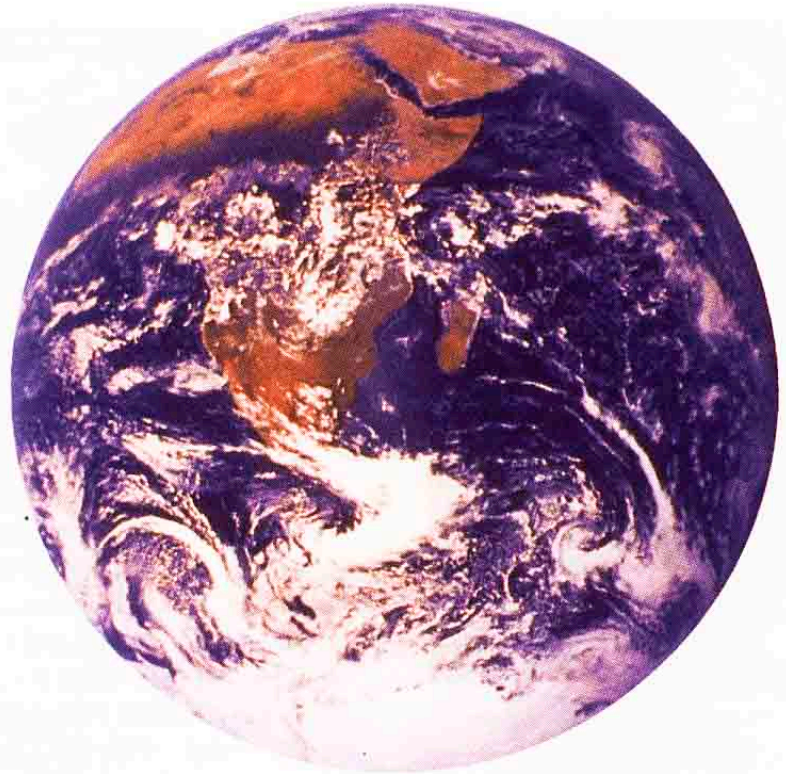
天父は私たちをととても愛しておられるので、私たちの救い主として御子を遣わしてくださいました。そのほかにも数多くの賜と祝福を与えてくださっています。しかし、多く与えられた者は多く求められることを忘れてはなりません。(教義と聖約82：3参照) 敬虔で従順な態度を通して、私たちは主に感謝を表わすことができます。

主は、私たちが住むためにこの地球を与えてくださいました。

そのお返しとして、私たちは地球を大切に守っていかねばなりません。

主は私たちに、家族を与えてくださいました。

そのお返しとして私たちは、家族を助け、さらに一致し親密になれるよう



最善を尽くすことができます。

主は私たちに、物質面でさまざまな祝福を与えてくださいました。

そのお返しとして、私たちは日々主に感謝し、忠実に什分の一を納め、困っている人々を助けることができます。

主は私たちに、聖典を与えてくださいました。

そのお返しとして、私たちは「生命の言」(教義と聖約84：85)を熱心に学ばねばなりません。

主は私たちに、現代の啓示を与えてくださいました。

そのお返しとして、私たちは生ける予言者の言葉に耳を傾け、その導きに従うことができます。

主は、私たちが慰めを受け、真理に導かれるために聖霊を与えてくださいました。

そのお返しとして、私たちは静かな細い声に聞き従うことができます。

主は私たちに、愛を与えてくださいました。

そのお返しとして、私たちは主を愛し、互いに愛し合うことができます。

主は私たちに教会を与えてくださいました。

そのお返しとして、私たちは毎週礼拝に集い、自分やほかの人々の信仰を強めていくことができます。

主は私たちに、神聖な責任を伴う神権を与えてくださいました。

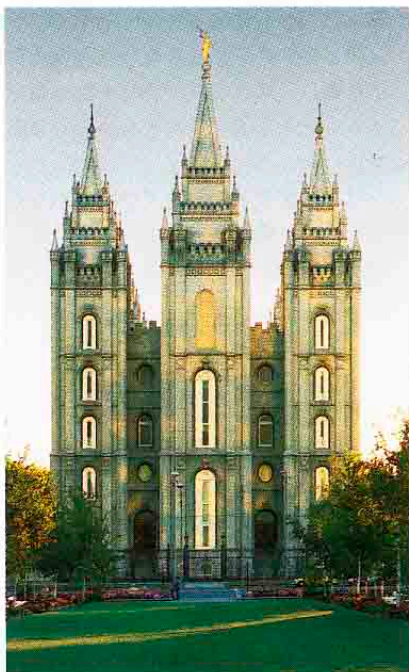
そのお返しとして、私たちは神権を尊ばねばなりません。

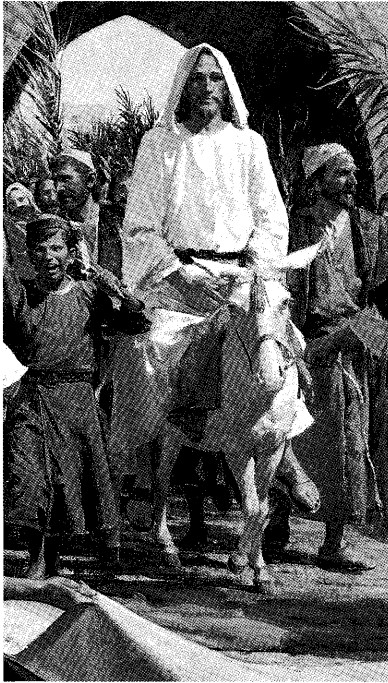
主は私たちに神殿を与えてくださいました。主はその扉を開いて、私たちが自分やほかの人々のために非常に神聖な、救いに欠かせない儀式を執り行なえるようにしてくださっています。

そのお返しとして、私たちは神殿を尊ぶ気持ちを忘れず、しばしば参入して神殿の業がなされるのを目にする必要があります。

主は私たちに、最も偉大な賜である贖いを与えてくださいました。救い主は私たちの罪の代価を支払って、すべての人が復活できるようにしてくださいました。また、私たちがふさわしいならば昇栄できるようにもしてくださいました。

そのお返しとして、私たちは信仰を持ち、悔い改め、バプテスマと聖霊の賜を受けて、終わりまで堪え忍ぶ必要があります。□





CHRIST'S TRIUMPHAL ENTRY INTO JERUSALEM, BY DEL PARSON

イエスの最後の日々

アン・ウッドバリー・モア

イエスの生涯の最後の1週間は重要な出来事の連続でした。新約聖書の四福音書の中から復活の前後の部分を読み直してみましょう。(マタイ26-28章;マルコ11:12-16;14-16章;ルカ22-24章;ヨハネ18-20章)次に、各曜日に起きた出来事を書き入れましょう。

- 土曜日——聖別の日 _____
 日曜日——民衆の日 _____
 月曜日——権威の日 _____
 火曜日——対立の日 _____
 水曜日——休息の日 _____
 木曜日——親交の日 _____, _____, _____
 金曜日——受難の日 _____, _____, _____, _____, _____, _____, _____
 土曜日——静寂の日 _____
 日曜日——勝利の日 _____

1. 3時間にわたって、地上の全面が暗くなる。
2. 日の出ごろ、カヤパとユダヤのサンヒドリンによって正式にイエスへの判決が言い渡される。
3. ベタニヤで、マリヤがイエスの足に香油を塗る。
4. イエスが息を引き取る。
5. 人々がイエスにいばらの冠をかぶせ、嘲弄する。
6. イエスが、実をならせないいちじくの木をしかり、宮を清める。
7. 墓に番人が置かれる。
8. ピラトがイエスをヘロデの元へ送る。
9. イエスが使徒たちと「最後の晩餐」をともにする。
10. 兵卒がイエスのわきをやりで突

き刺す。

11. クレネ人シモンが、十字架を背負ってカルバリに向かうイエスを助ける。

12. イエスがエルサレムに勝利の入城をする。

13. イエスはベタニヤで友人とともに休息の一日を過ごしたと思われる。

14. イエスがアリマタヤのヨセフの墓に葬られる。

15. 午前6時ごろ、イエスがローマの総督ポンテオ・ピラトに引き渡される。

16. イエスがゲツセマネの園で祈る。

17. イエスが死人の中からよみがえり、勝利を得る。

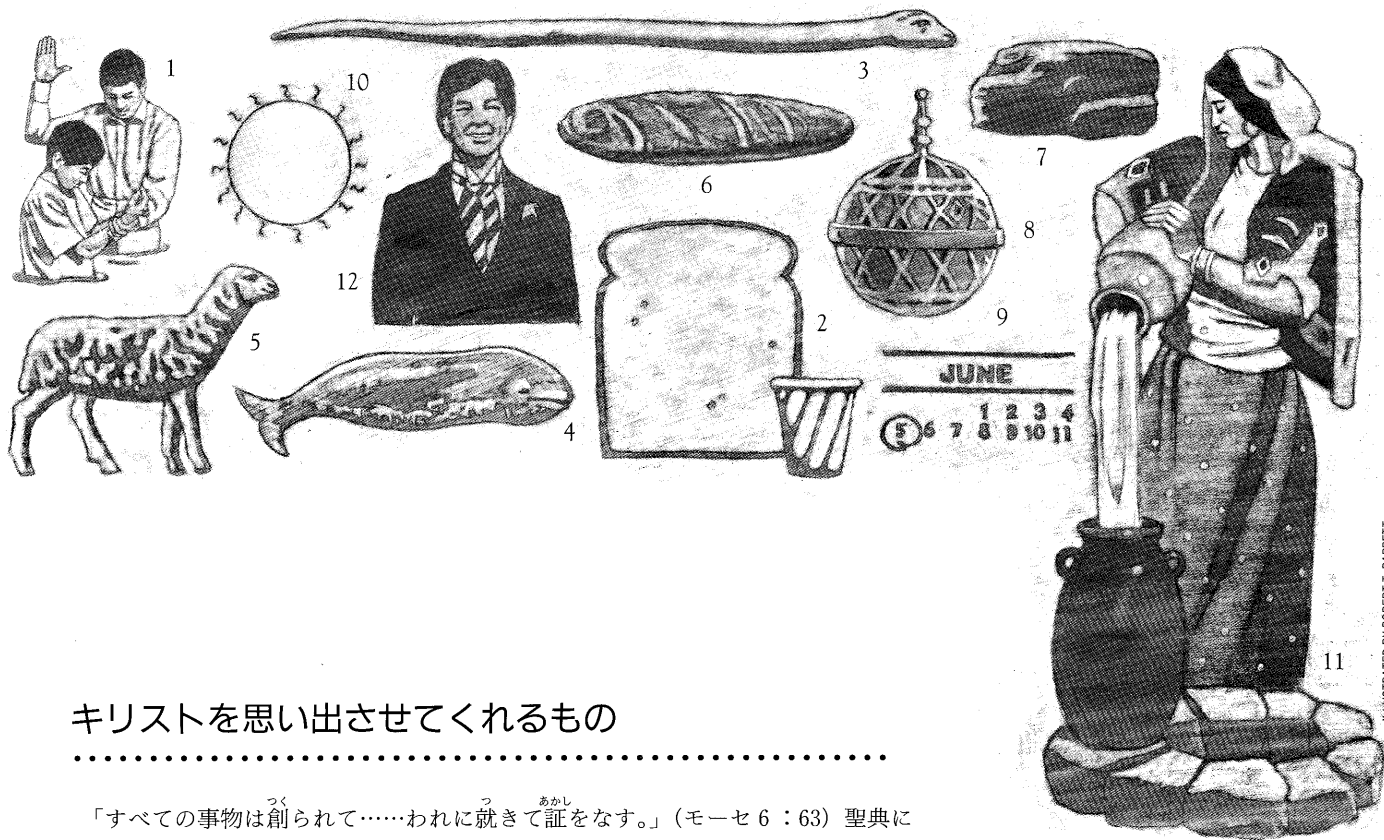
18. 兵卒たちがイエスの上着を分ける。

19. イエスが宮やオリブ山で教えを説く。

20. ヘロデがイエスをピラトの元に送り返し、ピラトはバラバを釈放してイエスを十字架につけるために引き渡す。

21. 真夜中近く、ユダが接吻をもってイエスを裏切り、イエスは祭司長、律法学者、長老たちによって捕らえられる。□

2011年11月18日 11:47:14 日曜 7
 2011年11月16日 19:13:13 水曜 9
 2011年11月15日 21:16:16 金曜 8
 2011年11月14日 10:10:10 土曜 7
 2011年11月13日 19:13:13 水曜 9
 2011年11月12日 12:12:12 日曜 7
 2011年11月11日 11:11:11 日曜 7



ILLUSTRATED BY ROBERT T. BARRETT

キリストを思い出させてくれるもの

「すべての事物は創られて……われに就きて証をなす。」(モーセ6:63) 聖典に記されている事柄、また私たちの生活の中にある事柄は、どれもキリストとその犠牲を象徴しています。ここに描かれている事柄は、キリストとどのように関係しているのでしょうか。

答え——

1. バプテスマはほかの何よりも、イエス・キリストの死と復活を象徴するものです。また、私たちがバプテスマを受けるとき、主に従って新しい生活を始めることを約束します。(ローマ6:3-4)
2. 聖餐のパンと水はキリストの体と血を象徴し、主が私たちの罪を贖ってくださったことを思い出させてくれます。また、私たちは聖餐を受けるとき、バプテスマの際に主と交わした誓約を新たにします。(モロナイ4:3; 5:2)
3. モーセは荒野で黄銅のへびを上げ、それを見るすべての人が癒されるようにしましたが、これは、私たちが自分の罪の赦しを受けるためにキリストに目を向けなければならないことを教えています。(ヨハネ3:14-15; ヒラマン8:14-15; アルマ33:19-22)
4. ヨナが3日間「大いなる魚」の

- 腹の中にいたのは、キリストが死に、復活するまでの期間が3日であることを私たちに示し、思い出させます。(ヨナ1:17; マルコ:9:31)
5. イエスは神の子羊と呼ばれます。イスラエルの民がモーセの律法のひとつとして、群れの中から、傷のない雄の初子を犠牲に捧げたことは、天父が御子を犠牲にされたことを象徴しています。(出エジプト12:5; モーセ5:7)
6. イスラエルの民に与えられたマナは、人はパンだけで生きるのではなく、「命のパン」であるキリストの語られる言葉によって生きることを教えています。(申命8:3; ヨハネ6:35)
7. 「われらの救の岩」(詩篇95:1) などというように、多くの予言者がキリストを岩や石にたとえています。どの建物にも隅石がありますが、キリストは私たちの教会と信仰の隅のかしら石です。(エペソ2:20)

8. リアホナがリーハイとその家族を約束の地に導いたように、キリストのみ言葉も私たちを約束の地へ導いてくれます。(I ニーフアイ16:10, 26-29)
9. 日曜日を安息日として聖く保つことによって、私たちはキリストが週の最初の日に復活されたことを思い起こし、その日を主に捧げることができます。(ヨハネ20:1; 教義と聖約59:9-10)
10. 光は私たちに、救い主は「世の光」であることを思い出させてくれます。(ヨハネ9:5)
11. 水は、キリストが生ける水であり、「沸き出でて永遠の生命となる」ことを示しています。(教義と聖約63:23)
12. キリストは、10人の乙女のたとえの中でご自分を花婿にたとえられました。主が再臨される日に備えて準備を整える大切さを説かれたのです。(マタイ25:1-13) □



PHOTOGRAPH BY WELDEN
ANDERSEN; POSED BY MODELS

聞く耳



何年間も息子に説教ばかりしてきましたが、30分間息子の話に耳を傾けたときの方が、はるかに息子のことをよく理解できました。

テッド・ハインドマーシュ

息子が腰を下ろしました。不機嫌そうに床を見詰め、いらだたしい気持ちを抑えようとしています。そんな息子を抱き締めたい気持ちがしました。息子も私と同様に、心からコミュニケーションを持ちたいと思っていました。しかしふたりともうまく気持ちを伝えられな

いでいました。もう一度息子を抱き締めることができれば、と思いました。そう、小さかったころのように。そうすれば私の愛情と心配をわかってもらえるかもしれません。しかし16歳ともなると、そのような愛情表現は恥ずかしがって嫌がるだけです。特に父親からとなると余計です。

息子がこぼしました。「そんなの絶対無理だよ。お父さんの期待が大きすぎるんだ。ぼくはそんな器じゃない。」

「それは違うな。」私が言いました。そして自分自身が若く未熟だったころのことを思うにつれ、声も大きくなっていきました。「どうしてだい。お父さんが若かったころはだな……。」

そこで息子が口を挟みました。「お父さん、ちっともわかってないよ。お父さんはいつだってわかってくれない。」

もちろん、わかっているつもりなのです。大切なことを息子に伝えたい一心で、私の心は痛みました。

なんとしても教えたい教訓があるのです。しかし息子は私の気持ちをわかろうとしません。

私はそんなに年を取ってはいないはずで

す。息子と同じ立場にいたのは、そんなに昔のことではないと思うのですが。

自分自身が10代だったころのいらだちについて、何度息子に真剣に語ったことでしょうか。聖典から引用したことも何度あったでしょうか。幾度も息子を座らせては、自分自身の経験から得た健全で良識のある忠告をしてきました。

息子さえ私の言ったことすべてに耳を傾けてくれれば、私がしっかりした考えを持って話しているのがわかるはずなのです。しかし息子は理解してくれません。それは息子が私の言っていることを聞いてくれないからなのです。息子が突然立ち上がり、出て行こうとしたので、私は呼び止めました。

そして息子にこう尋ねたのです。「少しは私の話を聞いてくれないか。」

議論になってから初めて、息子が私の方をまっすぐ見詰めました。その視線には少し戸惑いましたが、その答えにはもっと戸惑いました。

「お父さん、ぼくはいつだってお父さんの言うことを聞いているだけだよ。それじゃあ言うけど、お父さんこそ少しはぼくの話聞いてくれたっていいじゃないか。」

初め息子の言葉に驚きを感じ、うろたえてしまいました。たとえば私が息子に聞くことを求めていたとしても、どこか間違っているのでしょうか。なんとと言っても私は父親なのですから。

しかし座って考えていると、突然息子の言うことはもっともだと思ふようになりました。私は耳を傾けるべきときに、いつも話しているか、説教しているかだったのです。息子に対する私の心配は妥当なものでした。しかしその表現のしかたが妥当ではなかったのです。

それからの数日間で、気づいたことがあります。私は息子に与えようとしていた知恵を誇っていましたが、聞くことの大切さについては学んでいなかったのです。私の経験や考えの方が息子の経験や考えよりも重要であると、知らず知らず言っていたことになるのです。自分の無神経さが嫌になりました。

耳を傾けていなかったのは息子に対してだけではありませんでした。主が聖任された人々に対しても耳を傾けていなかったのです。親である私たちは、このように勧告されています。「親は子供の話に耳を傾けることに多くの時間を割くべきで、一方的に話すだけではいけません。しかも心を開いて耳を傾けます。自分の気持ちや問

題、成功などを自由に話せることを子供が知れば、親子の間にすばらしいきずなが生まれます。」(ベン・B・バックス「聖徒の道」1994年1月号, p.34)

もしこれからも自分の立場からだけ息子を見ていたら、息子を理解できるわけがないのに気づきました。そして真剣に息子とみたまの声に耳と心を傾けなければ、息子の考えを理解することはできないとわかりました。

また、聞くということが愛情表現の方法であるとはつきりわかりました。たとえ腕の中に抱けないほど子供が大きくなっている場合でも、聞くことによって子供に愛情を示せるのです。聞くことで、大切に思う気持ちと尊敬の念も示せます。

じゅうぶんに考えて、悔い改めてから、再び試みることにしました。

そして息子にこのように尋ねました。「話す時間、あるかい。もう一度、チャンスをくれないか。」

「お父さん、その必要があるかな。言いたいことはわかるけど、あまり気が乗らないんだ。」

私はこう言いました。「今度は役割を変えたいんだ。おまえが話して、お父さんが聞くというのはどうかな。信じられないだろうが、アドバイスはおまえが求めてきたときだけにするから。」

その時の息子の笑顔は、うれしいことに数日前に見せた表情とは対照的でした。いつもと違って、私は熱心に耳を傾けました。何度か口を挟みそうになって、舌を制しなくてはならないこともありました。しかし、何年間も息子に説教ばかりしてきましたが、30分間息子の話に耳を傾けたときの方が、はるかに息子のことをよく理解できました。

それ以来、何度も心を開いて話し合うようになりました。今では何でも話せるようになったと感じています。いつも意見が一致するわけではありません。しかし耳を傾けることにより、互いに理解できるようになり、以前の会話で陥りがちだった落とし穴を避けられるようになりました。

パウロが述べているように、進んでコミュニケーションを図ろうとすることは、「未来に備え〔た〕よい土台」の一部でもあります。(Iテモテ6:18-19参照) 耳と心を傾けることは容易ではないかもしれませんが、非常に大切なことです。そして、愛されていると感じる必要のある伴侶や子供たちにとってはとりわけ重要です。□



「エツケ・ホ王（見よ、この人だ！）」 フントニオ・シセリ画 Scala/Art Resource, New York

イエスは祭司長たちから扇動罪で訴えられ、ユダヤ総督のローマ人ピラトに引き渡された。ピラトは「この人になんの罪も見いだせな」かった。彼はイエスに間違った判決を下すことを恐れ、イエスを公衆の前に引き出して、ユダヤ人たちに評決させた。

イエスは「いばらの冠をかぶり、紫の上着を着」たままで外へ出られた。

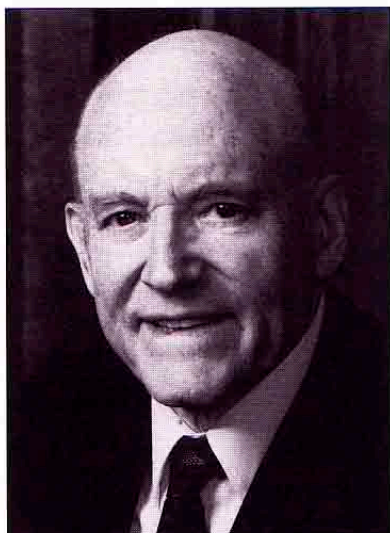
あざける兵卒たちの仕業である。ピラトは、はつきりとう言った。「見よ、この人だ。」（ヨハネ19：1-5参照）



セミナリーの生徒たちが集うハンガリーのこの町は、かつてイオシフ・スターリンの名を冠していた。彼らは福音のすばらしさを見いださただけでなく、その喜びをほかの人人にも分かち合っている。
(本誌『ドナウ河畔のセミナリー』p.34参照)

ハワード・W・ハンター 大管長死去

ソルトレークシティ一発



ハワード・W・ハンター大管長は、1995年3月3日、ソルトレークシティの自宅で老衰のため死去した。87歳。ハンター長老は教会の大管長としてこの9カ月間、聖徒たちに、もっとキリストに近い生活を送り、神殿に参入するふさわしさを身につけるよう呼びかけた。ハンター長老は長年にわたり数々の深刻な病気と闘ってきた。前立腺癌もそのひとつで、最近、癌が骨に転移していることが発表されていた。その死により、1959年に十二使徒定員会に召されて以来、約35年にわたるハンター長老の教会幹部としての奉仕の業に終止符が打たれた。1959年当時、教会員の総数は200万人に満たなかった。これまでの長い年月の間、彼はその務めを通して教会の成長に貢献し、現在、教会員数は900万人を超えるに至った。会員は150の国と属領地に分布している。このうちメキシコでは、昨年12月にハンター大管長みずから、教会の2,000番目のステーク部を組織

した。

しかしハンター大管長の働きは、単に教会員数の増加によってのみ計れるものではない。大管長の一人一人への思いやりは、彼の奉仕の真の足跡として語り継がれるだろう。穏やかで親切な人物であったハンター大管長は、教会員に「互いにもっと親切にし、もっと礼儀を尽くし、もっと謙遜で、忍耐強く、赦し合う」ように勧告したが、まさにそれを体現する生涯を送った。また、主の示された「愛と希望と慈悲」について触れ、「主イエス・キリストの生涯と模範に、これまで以上に注意を払って生活する」よう聖徒たちに勧めた。

大管長はさらにこのように語った。「すべての点で、またどのような境遇にあっても、神の御子に従いましょう。主を私たちの模範とし、導き手としましょう。」

ハンター大管長が大管長としての業を推し進めるうえで最も重視したのは、主の神殿を教会員であることの崇高な象徴とし、最も神聖な誓約を交わす至高の場所とするように、という教会員への招きであった。大管長はこう述べている。

「私の心からの願いは、すべての教会員が神殿に参入するふさわしさを身につけることです。……

神殿に参入し神殿を愛する民となりましょう。」

これらの言葉にふさわしく、彼が執り行なった公式の務めの最後はユタ州バウンテフル神殿の奉獻であった。亡くなる2カ月前のことである。ハンター大管長は車いすで献堂式に出席した。健康状態が思わしくなかったため、

車いすの使用を余儀なくされていた。

しかしハンター大管長は、たびたび健康状態は深刻ではないかのように振る舞っていた。まだ十二使徒定員会会長だったころ、総大会での説教を始める前にこのように言ったことがあった。「恐縮ですが、座ったままでお話しさせていただきたいと思います。皆さんが腰かけて大会の模様を楽しんでいらっしゃるようなので、私も皆さんの模範に倣いたいと思うのです。」

大管長自身、愛する主に仕えるときに犠牲と忍耐のすばらしい模範を示した。ハンター大管長は1907年11月14日、アイダホ州ボイシに生まれて後にカリフォルニアに移り、同地で法律を勉強した。1931年にクララ（クレア）・メイ・ジェフスと結婚し、3人の子供を授かったが、ひとり幼くして世を去った。

子供たちの成長を見守りながら、ハンター大管長は仕事の面でも活躍し、教会でも監督、高等評議員、ステーク部長など、さまざまな召しを果たした。ステーク部長の任にあった時は教会の南カリフォルニア福祉地区の責任者を兼務し、後にはロサンゼルス福祉地区の責任者となった。教会幹部となつてからは割り当てを受けて世界各地のステーク部や伝道部を訪問し、生涯にわたって教会員に対する一層の愛をたくさんでいった。

1983年、クレア夫人が亡くなった時、ハンター長老は大きな悲しみに沈んだ。7年後、イニッシ・バーニス・イーガン姉妹と再婚した。彼女はハンター大管長の最期をベッドの傍らでみとった。遺族はイニッシ夫人とふたりの息子、18人の孫、22人のひ孫である。□

阪神大震災被災者への救援活動

会員の力を結集し、迅速になされた 物心両面にわたる援助

1月17日未明、阪神地域を地震が襲った。アジア北地域会長会会長で七十人のデビッド・E・ソレンセン長老によると、監督、ステーキ部長

をはじめとする神権指導者および補助組織指導者らは、被災者を援助するため、迅速かつ効率的に対応したとのことである。

この地震は5,000人以上の人命を奪ったが、ソレンセン長老によれば、さいわい、地震に遭った阪神地区の全宣教師の無事が確認されており、宣教師たちは、意欲的に援助活動に携わっている。

過去70年間で最高の死者を出したこのたびの地震は、マグニチュード7.2と計測された。

ソレンセン長老は、1月24日、地域監督の北村正隆兄弟とともに被災地を訪れ、その被害状況とともにそこでなされている無私の奉仕をつぶさに目にした。

ソレンセン長老は電話でのインタビューに対し、こう語っている。「監督もステーキ部長も、自分の家族の安全を確保すると、ただちに昼夜を問わない救援活動に立ち上がり、その指示に当たりました。」ソレンセン長老は、危機に際して自発的に援助を申し出た教会員の数の多さに感動したと述べ、とりわけ教会の姉妹たちの働きについて次のように語っている。「姉妹たちは雄々しく働いています。水を運んだり、食べ物を用意したり、子供の世話をしたりしています。語り尽くせぬほどのすばらしい働きをしているのです。聖徒のためばかりではなく、隣人の窮状を和らげようと多大な働きをしている彼女たちに称賛の言葉を送りたいと思います。」

七十人でアジア北地域会長会の韓仁相長老とサム・K・島袋長老は、堪能な日本語を生かし、聖徒たちに生じた諸問題に効果的に対応するとともに、援助活動に直接携わっている。

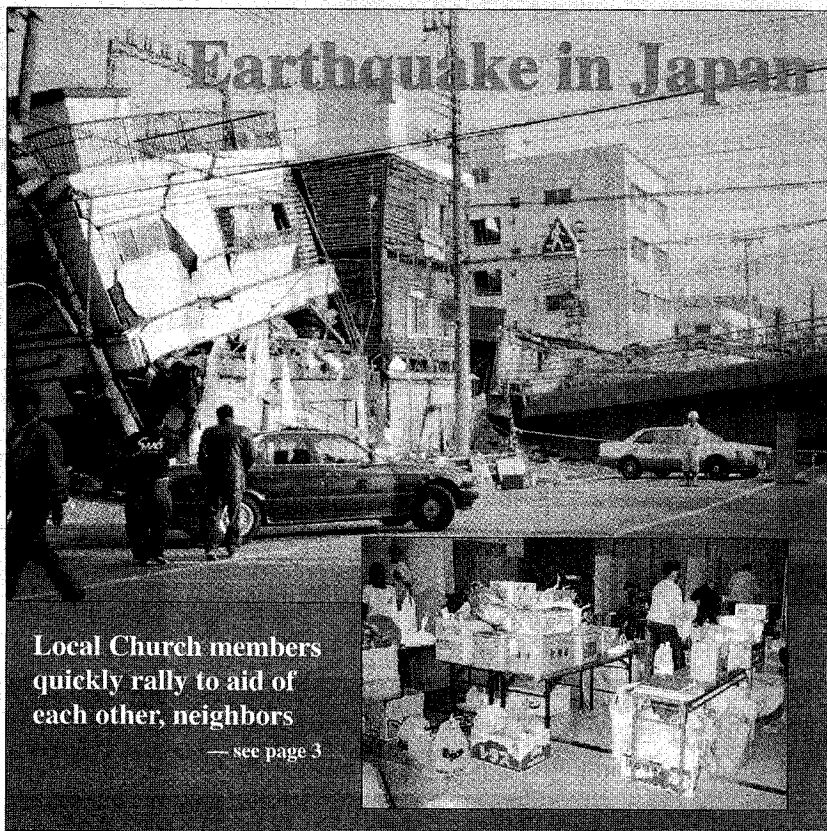
東京にあるアジア北地域管理本部からは、阪神地域の事情によく通じた教会職員が地震発生から数日後には派遣

WEEK ENDING JANUARY 28, 1995

Church News

Published by the Deseret News, Salt Lake City, Utah

THE CHURCH of
JESUS CHRIST
of LATTER-DAY
SAINTS



Local Church members quickly rally to aid of each other, neighbors

— see page 3

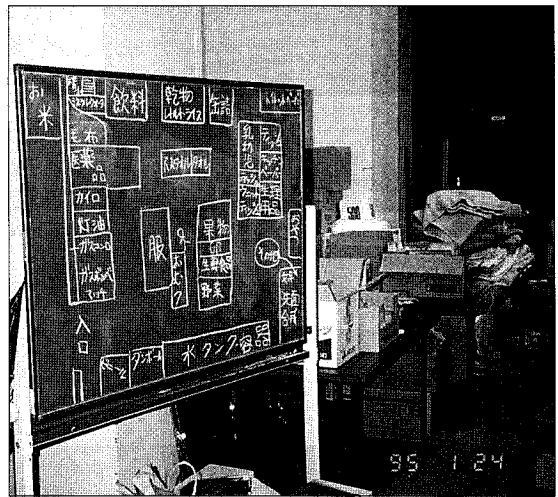
First of the 1995 mission presidents announced — see page 5

阪神大震災の記事は、「チャーチニュース」(英文)の1995年1月28日付で大きく取り上げられた。阪神地域を襲った大地震の被害は建物だけでなく、人々の生活にも及んだ。家を失った人々の中には教会員も数多くいる。地震に見舞われた直後から、教会の指導者たちは会員と力を合わせて援助活動に取り組んだ。神戸ワード部の集会所に仮設された緊急物資配給センター(右下)もその一例である。

地元の神権指導者および扶助協会からの要請により、全国から送られた衣類などの救援物資は、約1,800個のダンボール箱に仕分けされた。さらに、大阪ステーキ部阿倍野ワード部に搬入された物資は、いったん明石ワード部に運ばれ、そこから長田区の小学校の校庭や町内会で被災者に届けられた。



写真左——神戸ワード部と西宮ワード部の教会堂に運び込まれた500個以上のポリタンクの飲料水。写真下——被災者に届けられた衣類。2月12日。（長田区の小学校の校庭で）



被災者用に集められた物資は、必要に応じて配給できるように仕分けされ、欲しい物がすぐに取り出せるように保管場所が板書されている。（神戸ワード部）



されて被災地の神権指導者の助力に努め、被災地への援助物資の配布も行なった。

この地震によりひとりの教会員が死亡した。永井君子姉妹(76歳)である。教会員でないご主人の勇三さんも亡くなった。また、35世帯の教会員が地震で家を失った。(2月28日までの調査では、新たに宮前稲子姉妹〔西宮ワード部、44歳〕の死亡が確認されている)

日本神戸伝道部のカーチス・P・ウィルソン伝道部長は、求道者の家族のふたりの子供も死亡したと語っている。その家族は現在神戸ワード部の集会所に避難しており、亡くなった子供たちを偲ぶ会も同集会所で行なわれた。

1月24日現在、被災地の教会員の状況報告の大半は、宣教師の力を借りて神権指導者によって行なわれている。

これはほとんどの電話回線が不通になっており、連絡の多くが徒歩か自転車で行なわれているためである。

神戸ワード部監督の高木信二兄弟宅には地震発生直後から問い合わせの電話が殺到している。ウィルソン伝道部長の話では、奥さんの高木スー姉妹は限られた日本語力を懸命に使い、相次ぐ電話に誤りなく対応しているという。高木監督は、勤務先の大学から休暇を取って、助けを必要としている人々の援助に献身している。

2軒の宣教師アパートが避難を余儀なくされた。神戸市の北端に位置する西宮市のアパートでは宣教師が着の身着のまま逃げ出したと、ウィルソン伝道部長は語る。アパートの損壊はかなりのものであった。神戸市の北144キロにある彦根市の宣教師アパートも、

もはや居住施設として使用できないほど破壊された。

ソレンセン会長は、調査チームがまだ到着していない段階で、被災地域にある教会所有物の損害状況を評価するのは時期尚早であると述べ、「しかも現時点では被災地を見て回るのはきわめてむずかしい状況です」と指摘している。

ウィルソン伝道部長によれば、いち早く救援物資が到着したのは、福知山地方部の門脇保文地方部長からであるという。門脇地方部長は神戸市の北にある西脇支部に所属し、地震発生後毎日のように飲料水を含む日常的な救援物資をみずからのトラックで神戸ワード部の集会所まで運んだ。

神戸ワード部の集会所とそれに隣接する日本神戸伝道本部の建物は、教会



神戸ワード部から被災地へ物資を搬出する教会員のボランティア。
右側の人物は、神戸ステキ部の堂ノ本ステキ部長。

員と教会員でない人々の避難所として使用され、集会所の一部は応急の配給センターとして使われた。バプテスマフォントはきれいに清掃されて、被災者が最も必要としているもののひとつである水をためる場所になっている。

神戸ステキ部の堂ノ本勉ステキ部長の呼びかけによって、食糧や必需品がさらに近隣の諸都市から集まった。隣接するワード部、ステキ部、地方部からトラックに積んで食糧やそのほかの必要な品々が運び込まれた。

被災地域の教会員は自家用車を使って、集会所に設けられた配給センターへ自発的に物資を搬入している。被災地域へは、救援物資を届ける車両しか通行が許されていない。

地震発生後最初の数時間は、宣教師たちが救援物資の収集や分配を行なったが、その後は神権指導者や補助組織指導者が、宣教師とボランティアの力を借りて担当家族の必要を満たした。彼らは救援活動に従事し、それらを運営したが、ウィルソン伝道部長によれば、「速やかに処理されている」という。

教会のボランティアは時間交替で、トラックの荷物を降ろしたり、物資を仕分けしたり、日常的な支給品や救援物資を自転車やバイク、あるいは徒歩で配っている。ソレンセン長老によれば、神戸市で最もひどく破壊された地域のひとつは神戸ワード部の集会所か

ら歩いて15分程度の場所であるという。

教会員はまた、各自が住む家の近隣でも彼らにできる助けをしていると、ウィルソン伝道部長は説明する。たとえば地震が発生した時、西宮ワード部のある会員は両わきに子供を抱え、ガラスが足に刺さったまま家を飛び出した。彼は家屋に深刻な被害を受けたにもかかわらず、家族の安全を確保すると、近所を回って応急のテント作りをする人々を手伝った。教会から物資を受け取ると、彼は近所の人々とそれを分かち合った。

「危機を通じてキリスト教徒として深く根ざす徳が示されたすばらしい実例です」とウィルソン伝道部長は語る。

最も必要とされる援助のひとつは情緒面でのサポートであると伝道部長は付け加えた。「生活は完全に混乱しています」と彼は説明する。「おおぜいの人々が希望を失い、話し相手もありません。まほうっておかれています。宣教師は食糧を配り、後片付けを助けるだけでなく、相手の話を聞き、友達になっています。」

神戸ワード部のある教会員は自営業の薬局がまったくつぶれてしまったと、ウィルソン伝道部長は語る。薬の販売は完全にできなくなってしまったが、宣教師は彼ができるかぎりの薬品を握り出すのを助け、それらの薬品は無料で必要な所に配られた。

●教会員被害状況（2月28日現在）

教会員の死者……………2人
教会員の家屋の全半壊
神戸ステキ部……84棟
大阪北ステキ部…5棟

●教会施設の被害状況

神戸伝道本部、神戸ワード部、西宮ワード部のそれぞれの建物の壁やガラス、塀など数カ所にひび割れが生じたが、通常の集會に差し障りがあるほどの被害ではなかった。

ソレンセン長老とウィルソン伝道部長は、30万人が住む家を失った被災地域にあって、人々の行動に感銘を受けた。

「大きな被害の中で、決然と境遇に立ち向かう人々の勇気と意志力に、私は感動しました。」ソレンセン会長はそう語る。

略奪が行なわれているという報告はなく、かえってあちこちで寛容な態度が見られる。必要な商品を置いた数少ない販売店で、客が整然と列を作り、辛抱強く順番を待つ姿も、ソレンセン会長とウィルソン伝道部長は目にした。食品や生活用品を購入した人々が外の長い列を見て、ほかの人々にも行き渡るように自分の買ったものを一部戻しているのにも、ふたりは気づいた。「彼らにとってそれは当たり前のことなんです」と、ウィルソン伝道部長は語る。

神権指導者は、地震以来次々と寄せられる援助の申し出に感謝の意を表明している。アジア全域から、心配している日系アメリカ人のかたがたから、また援助を申し出るそのほかのかたがたから電話やファックスを受けていると、ソレンセン会長は語っている。

「教会は現在、会員を援助し、可能な場所では教会員でない人々にも援助の手を差し伸べています」とウィルソン伝道部長は語っている。（「チャーチニュース」1995年1月28日付）

*震災関連記事は、5月号にも掲載いたします。

陸の灯台—— バウンテフル神殿の献堂式



28回にわたって行なわれたバウンテフル神殿献堂式で、1月8日の2回目のセッションの順番を待つ会員の列。6カ所で行なわれた1回目のセッションには、1万人以上の人々が出席した。

1995年1月8日（日）午前8時、バウンテフル神殿では28回におよぶ献堂式の1回目が行なわれた。昨年10月に献堂されたフロリダ州のオーランド神殿に続き、これが大管長就任後2度目になるハワード・W・ハンター大管長が献堂の祈りを捧げた。最初のセッションでは、バウンテフル市の東端に位置する白亜のバウンテフル神殿に約2,000人、ほかにソルトレークシティからローガンまでの間にあ

る5カ所で約8,000人が出席した。献堂の祈りに先立って、ハンター大管長、ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長、トーマス・S・モンソン第二副管長、ボイド・K・パッカー十二使徒評議員会会長代理が話をした。

セッションはこの後、1月14日（土）までに1日4回ずつ、バウンテフル神殿、ソルトレークシティのタバナクル、バウンテフル地区センター、オグデンのタバナクル、ブリガムシ

ティーのタバナクル、ローガンのタバナクルで行なわれ、ユタ北地域に在住する8歳以上のふさわしい教員が出席するように招待された。

ハンター大管長は6つのセッションを管理して、4つのセッションで話をした。残りのセッションはすべて副管長が交替で管理し、17回話をした。最初のセッションではハンター大管長が献堂の祈りを捧げたが、その後はふたりの副管長や十二使徒評議員会会員が行なった。さらにすべての献堂式を通じて、大管長会、十二使徒評議員会、七十人定員会、管理監督会、神殿長夫人を含む神殿長会から49人が話者に立ち、28ステーキ部の聖歌隊が音楽を担当した。

バウンテフル神殿は、1988年に建設が発表されてから4年後に、エズラ・タフト・ベンソン大管長が献堂式を行なっている。昨年の11月5日から12月17日までの6週間は、4万5,000人の奉仕者の助けを受けて、87万人を超える人々がオープンハウスに訪れた。

□

教会員数、900万人に達する

教会員数は教会会員統計記録課の推定で900万人に達した。

1991年9月1日の時点で会員数は800万人に達していたが、最近出された推定値によると、さらに100万人増加したことが明らかになった。

これは偶然にも、教会の2,000番目のステーキ部が1994年12月11日に設立されて間もなくのことであった。その後、年末までに教会のステーキ部数は2,008に、ワード部と支部の合計は2万1,600を超えた。

教会員の居住地は、1991年当時、合

衆国以外では135カ国だったが、現在では150カ国に拡大している。増加した国の大半はアフリカあるいは東ヨーロッパの国々である。

会員数が100万人に達したのは1947年のことで、以後、1963年に200万人、1971年に300万人、1978年に400万人、1982年に500万人、1986年に600万人、1989年に700万人、そして、1991年に800万人を超えた。

現在入手できる最新の統計記録である、1993年度末の報告書によれば、当時の会員総数は868万9,000人で、その

うちアメリカ合衆国在住者は約452万人、中南米在住者は全体の31パーセントに当たる約268万2,000人、このほかの国々には全体の17パーセントに当たる148万6,000人が住んでいる。

1991年9月以来の増加率を換算すると、毎日約840人ずつ新会員が誕生していることになり、これはふたつのワード部の会員数とほぼ同人数である。また、3,800人規模の典型的なステーキ部が4日半ごとに誕生していることになる。

□

福音の証を乗せて走る禁煙タクシー

石川地方部金沢支部

川島良仁

長年の夢であった個人タクシー業を始め、もう3年になるとうっています。運転歴は23年になりますが、中でもタクシー業がいちばん長く17年になりました。

●仕事をしながらの個人タクシーの免許取得

個人タクシーの免許取得のころ、主から言葉に尽くせぬほど豊かな祝福を頂きました。受験2カ月前のことです。渡された教本などの関係資料の多さに思わず目の前が真っ暗になったものです。そのころは特に生活が厳しく、毎日支払いに追われる有り様でした。ゆっくり体を休めることもなく、小さな事故1件でさえ受験資格がなくなってしまうという条件下で、肉体的、精神的にも相当疲れを感じていたころです。間もなく講習も始まり、仕事もできなくなっていきました。代行運転をしていた私は、タクシーの洗車や清掃など妻の全面的な協力の下で、仕事と受験に集中したのです。

早朝4時近くまで仕事をし、9時には目を覚まして受験勉強をするという日々が続きました。そのころは、北陸地区の受験者は、全員合格という輝かしい実績があり、講習に注ぐ指導者の熱の入れようは大変なものでした。その中で、仕事を遅くまでこなし、それから勉強に取りかかるという具合でしたので、一部の先輩諸氏から厳しく注意を受けましたが、それでも、仕事をやめられないというジレンマとの戦いの日々でした。そのころから頭髪が目に見えて抜け始め、ブラシが毛で黒くなるほどでした。私は主に祈りました。そして祈りのたびに確信を得るようになったのです。自信がわいてきたので

す。しかし周りの目は厳しく、実績に汚点を残すのではないかと、「2兎を追う者は1兎をも得ず」という声が聞こえてきたのです。

受験者は2週間前、中には1カ月も前に仕事を離れ、受験に備えていました。そんな中で、私が仕事を離れたのは3日前でした。試験にはみごとに合格して、ようやく夢にまでみた開業にこぎつけることができました。苦しい日々でしたが、私はいつも主のみ手を身近に感じていました。そして、主からさらに大きな祝福を頂いたのです。

●「禁煙タクシー」の誕生

ある時、市内を走行中にひとりの若い女性客が乗車して、このように言われたのです。「なんて美しい車。たばこにおいがしないし、車内はきれいだし、ほんとうにうれしい！ 運転手さん、私ね、タクシーを待ちながら、たばここのにおいのする車だったらどうしようかと心配しながら待っていたんですよ。ほんとうによかった。」このような会話でした。

それをきっかけに以前から心に留めていた禁煙車営業認可への思いがさらに強くなって、金沢の個人タクシー協同組合の理事長と話し合ってみました。すると、組合からの後押しはむずかし

いが、一個人の資格で許可申請してみてもどうか、また申請書の内容はどのようにしてはと、いくつかのアドバイスを受けました。

その足で早速、石川陸運支局に出向きましたが、まったくわたしの意に反し、門前払いを食らってしまったのです。担当官の返事はまことに冷ややかで、今までにこのような事例を受け付けたことがなく、こちらとしてもわからないので出直すようにと、あっさりしたものでした。

●申請書、6回目でようやく受理

この時、負けん気の強いわたしの胸の中に静かな炎が燃え上がりました。それから何度となく通い詰め、6回目ようやく申請書を受理されました。担当官も根負けしたようです。そして1994年1月末日に「禁煙車」としての許可を受けたのです。

この出来事は、個人タクシー同業者間で大きな反響を呼び、賛否両論の反応がありました。北陸3県で1台しかない「禁煙車」「禁煙タクシー」ということでマスコミの関心を引くことになりました。地元の北国新聞社では夕刊に大きく写真入りで掲載され、FM石川放送でも私とのインタビューが放送されました。さらに北陸朝日放



川島ご家族

清潔な車内 受けてます

愛煙家は 吸ったら 拒否OK 途中下車

禁煙タクシー 順風発車

金沢で北陸初 陸運のお墨付き



列車や駅構内など公共交通機関に禁煙が広がる中、「喫煙拒否」の禁煙タクシーが金沢市に登場。街中を軽快に走り回っている。車内に「禁煙の表示をして客に協力を求める『禁煙』のマークはあるものの、中部陸運局の認可を受け運送契約にも禁煙をたうた正式な『禁煙タクシー』は北陸三県で初めて。たばこを吸わない客の方は、やがてのうちに車内の清潔さが好評を博す。禁煙の波はタクシーの車内にも及んでいく。

この禁煙タクシーは、向を走っており、禁煙マークが青く昨年九月ごろ市神内町、川島良さん、シを乗りたい」との思部陸運局川陸運局に運回さる個々タクシーで、薄緑色の車体に屋根の「禁煙車」のあとと、ドアの禁煙マークの表示が自立つ。

禁煙に厳格なタクシーは昨年夏、乗せ年配の客がやめた「たばこにおいしなタクシー」にいつも乗れないうね」といふ言葉から、川島さん自身、十年前に「たばこを吸うけれど、10分そこそこだし、乗ってまで吸うこともないよ」などと私の禁煙タクシーを応援してくれました。「ぼくもたばこをやめようと思っているんだが、この際やめてみるか」と言う人もいます。またある人は「私はたばこを吸っているけれど、周りで吸われるといやなんだ。この前もレストランで食事をしていると、左右で吸い始めたんだ。早々に出て来たよ。他人の吐いたばこの煙はいやなものだね」と笑いながら話していました。深夜のネオン街にあっては反発する人もいますが、ほんの一部の人だと思います。

「北国新聞」
(1994年5月17日付)

年11月に家族で改宗しました。そのころ、お酒を浴びるように飲んでいた私が、宣教師さんの訪れとともに、不思議とお酒を受け付けなくなったのです。後でその陰には宣教師さんの断食と祈りがあったことを知りました)

すると話の調子が初めて違ってきました。相手の方は黙って静かに聞いてくれるようになるのです。目的地に着くころには「運転手さん、久々によいお話を聞かせてもらったよ。こういう話は近ごろ聞いたことがなかった。ありがとう。」しばしば車の中で、こうした話に花が咲きます。

タクシーの運転をしながら改宗談や教会の話をするとき、それに耳を傾けてくれるお客さんの心には、確かに主のみたまが注がれていると感じます。

モルモン経の中には、ラモーナイ王が主のみたまを感じ、改宗した話が載っています。「その心を照す光、すなわち神の栄光の光……神の善徳の驚嘆すべき光は、ラモーナイ王自身に大

送約の變更手続きを相
談。一二月に正式申請
するプランのママさんか
ら(毎晩)指名がかかるほ
し認可を受けた。
認可に当たって運送約
教の中、屋根に禁煙の
ん(表示)のマークを乗
車口(ドア)にも表示を
る▼客を乗せる際にも
車は禁煙だ」と断り、
入れるの三つの条件が
いている。従って喫煙
客は「乗車拒否」もでき
ほか、仮に途中を吸い
出した場合、料金を増
たうて途中下車するの
めていこうとしており、
ともである。
目下は初心配た下下
煙タクシーの増加につ
アルもな、む、一晩

きな幸福を注ぎこみ、暗やみの雲のような無信仰と無知とを散らして永遠の生命の光を王自身の中に輝かせた……。」(アルマ19:6)

私のタクシーを利用してくださるひとりでも多くの人に、このような光が注がれるように願っています。私の願いをこんなふうにも実らせてくださった主に、心から感謝しています。(かわしま・よしひと)

送では、あるテレビ番組の中で20分ほど、禁煙タクシーをクローズアップして放送しました。

それから間もないころ、ある旅館の玄関にタクシーを横づけしたところ、従業員が迎えに出て来て「禁煙タクシーをテレビで見たよ。こんなに早く、近くで目にするとは思わなかった」と、たいそう感激してくれたのが強く印象に残っています。

許可を受けて早1年になろうとしています。今では広く金沢の人々に知られるようになりました。近ごろではお店のママさんから常連客を紹介してもらえるようになりました。乗ってくださるほとんどのお客さんは「禁煙車っていいね。車内はきれいだし、たばこにおいがなくて。私もたばこを吸うけれど、10分そこそこだし、乗ってまで吸うこともないよ」などと私の禁煙タクシーを応援してくれました。「ぼくもたばこをやめようと思っているんだが、この際やめてみるか」と言う人もいます。またある人は「私はたばこを吸っているけれど、周りで吸われるといやなんだ。この前もレストランで食事をしていると、左右で吸い始めたんだ。早々に出て来たよ。他人の吐いたばこの煙はいやなものだね」と笑いながら話していました。深夜のネオン街にあっては反発する人もいますが、ほんの一部の人だと思います。

●お客さんに改宗談を

お客さんとの会話の中で、こんな質問をよく受けることがあります。「じゃ、運転手さんは酒もたばこもコーヒーも口にしない、女も博打もやらんと何が楽しみで生きてるんや。不思議な人やなあ。男じゃないな。」

そのほかにも、いろいろなことを言って楽しむ人がいます。それらの言葉には、半分からかいの気持ちも含まれているようです。そのようなときには、みずからがクリスチャンであることを告げ、救いの計画や私の改宗のきっかけとなった不思議な体験を聞かせてあげることになっています。(1984

名古屋地区の教会の歴史 「尾張の始め」を編さん

☆……名古屋地区では伝道50周年の節目を迎えました。それを記念し、また、名古屋地区での教会の歴史を後世の人たちに伝え残すことを目的に名古屋地区教会歴史編さん委員会（代表委員・山本修——名古屋ステキ部名東北ワード部所属、祝福師）が組織され、「尾張の始め」（A4判、160頁）と題する名古屋の伝道の歴史が編さんされました。「このような信仰の歴史が各地でつづられ、次の世代に受け継がれるなら」と山本修兄弟は語っておられます。（「聖徒の道」編集室）

●「名古屋支部」同窓会をきっかけに

今でこそ名古屋地区にはふたつのステキ部に10のワード部、7つの支部があります。しかし、わずか25年前には、教会は愛知県内に1カ所しかなく、隣接の岐阜県・三重県・静岡県にはまったくありませんでした。その教会も、普通の民家を手直した建物で、雨が降ると雨漏りすることも、という状態でした。

そのころの「名古屋支部」を知る教会員が集まって、1990年10月に「同窓会」を開きました。初代の支部長であった柳田藤吉ご夫妻や、初期に名古屋で伝道された渡辺驩兄弟を囲んで思い出を語り合ううちに、名古屋の教会の歴史を書き残しておく必要があると出席者一同が強く感じました。

1993年5月に、名古屋伝道部のウォルター・L・エイムズ伝道部長（当時）、名古屋・名古屋西の両ステキ部の全面的な賛同の下に、歴史編さん委員会を組織しました。委員会には、両ステキ部の副ステキ部長にも入っていただきました。それから、1年半をかけて「尾張の始め——名古屋地区における末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史」が完成しました。

その内容は、歴史年表、おもな出来事とエピソード、個人の思い出や証、写真などの記録、若干の統計数値です。写真、資料などの協力をしてくださったかたがたは、米国在住のかたがたを含め約30人に上ります。また、巻末には各ワード部・支部の現在の姿を写真と文章で紹介しています。この部分は監督・支部長に執筆していただきました。

●先人たちの強い信仰と汗によって （「尾張の始め」序文より）

1945年の終戦の年に、名古屋地域に福音が伝えられはや50年の歳月が流れ、1995年は記念すべき年を迎えます。

名古屋の南の外れ、鳴海町（現名古屋市緑区）旧東海道の町並の一角で当時名古屋に進駐していた末日聖徒の米国兵士によってまかれた種は、この50年間で大きな成長を遂げ、日本名古屋ステキ部、日本名古屋西ステキ部、および日本名古屋伝道部と発展してきました。

当時は集会ひとつ開くにも、個人の

家や幼稚園、学校、そのほか公共施設を借りて、転々と渡り歩いていました。また、教材も少なく、指導者にも恵まれておりませんでした。現在では、それぞれのユニットにおいて、整った環境の中で充実したプログラムの集会が開かれています。考えてみれば、神様の大きな愛と、先人たちの強い信仰と汗、努力によって私たちはこれらの祝福にあずかっていると云えましょう。

名古屋地域での伝道の歴史は、日本伝道史の中にあっても貴重な役割を果たしています。たとえば、モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠、そのほか教会の重要な出版物の翻訳に携わった佐藤龍猪兄弟は、鳴海で最初に米軍兵士より福音を知らされた方であり、戦後日本人として初めてバプテスマを受けた方でもあります。

また、賛美歌の新訳をされた柳田聡子姉妹は、柳田藤吉兄弟とともに夫婦で初期の名古屋支部創設の基礎作りに尽力されました。さらに彼女は日本人として初めて伝道部扶助協会の会長に召され、全国の姉妹の指導に当たられました。

彼女の父親の故高木富五郎兄弟は、数少ない戦前の改宗者です。初版賛美歌の翻訳者であり、親子2代で賛美歌の翻訳に尽くしておられます。高木兄弟は、戦後の混乱期に私事を忘れて日本の伝道再開に尽力されました。晩年、名古屋の柳田家に同居され、豊富な経



1990年に「名古屋支部」を知る教会員が集まって開かれた同窓会

験とあついで信仰により神権者の指導に当たられました。そしてさらに多くの献身的な兄弟姉妹の信仰と奉仕が加わり、力強さと活気にあふれた歴史が築かれました。

教義と聖約第65章2節に書かれている聖句「神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され、福音はここより転じてきて世の果にまでも達せん。あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて、ついに全世界に充ち満つるが如し」のように、神様の福音はとどまることなく、この名古屋地域にあって今後ますます発展していくものと思います。

50周年の節目を迎えるに当たり、昔のことを覚えている人たちが健在で、資料が入手できるうちに、歴史記録としてまとめる必要があるのではないか

1949年最初の宣教師、呉屋長老（ハワイ出身）と求道者たち（鳴海にて）

という意見が多くありました。1973年に日本名古屋伝道部が創設されて20年が経過したこともあり、両ステーク部のステーク部長会、伝道部長会のご理解とご協力を得て、このたび本書を出版する運びとなりました。

歴史は、新しい事実や資料の発見によって絶えず訂正され、より完成度の高いものになっていくものです。教会の歴史につきましても、今後この記録



を基にそれぞれのユニットなどで新しい記録と事実を付け加えて、後世の人たちに伝え残していただければと願ってやみません。それによって、多くのかたがたの主に対する信仰と証が増し加わり、地上における神の王国が一層発展することを祈願しています。（レポーター：山本修）

「もうだめだ」と思うときに開かれた道

—— 受験、伝道、結婚、医者としての道 ——

熊本地方部 諫早支部 竹馬庸裕

私は浪人時代に宣教師から福音の教えを受け、1975年11月5日に、福岡支部（現福岡ワード部）でバプテスマを受けました。それから19年がたちました。学生時代、伝道中、そして仕事に就いてからも困難な局面に遭遇し、もうだめだとあきらめかけたことが何度もありました。すべてがうまくいったわけではありませんが、そのような状況下でも主の導きで道が開かれたことが何度かありました。

2年間浪人したために、大学（医学部）を卒業したのが26歳の時でした。私は、宣教師になるのが長年の夢でしたので、伝道部長に伝道に出たいと申し出ました。年齢が25歳を超えていたことから早く結婚するように勧められ、推薦を受けることができませんでした。（専任宣教師として奉仕するには、独身男性は19歳から25歳まで、独身女性は21歳から39歳までの年齢制限がある）

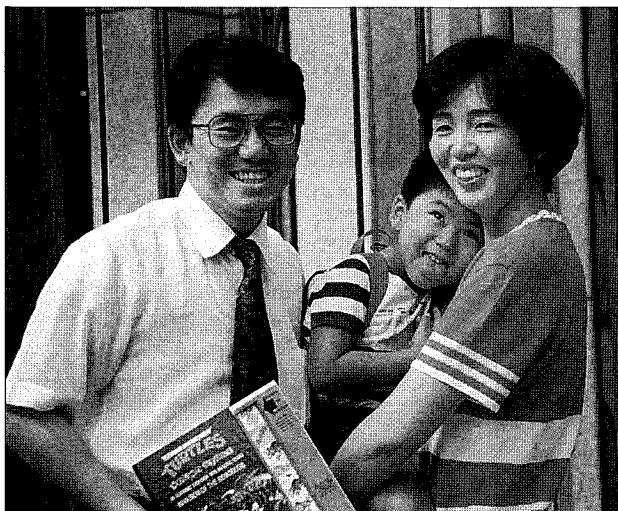
一度は断念した伝道でしたが、その

後不思議なことが起こりました。その年に熊本地方部による東京神殿の団体参入がありました。東京神殿の正面玄関前で、これから伝道に出て行くある姉妹と出会いました。その姉妹と結婚したいと思いましたが、彼女は私を置いて伝道に出て行きました。このまま待つより伝道に出ようかと決心し、もう一度伝道部長に相談しました。詳しいことは何も話しませんでした。当時のアジア地域会長のウィリアム・R・ブラッドフォード長老の許可を得て、その後伝道に出ることができました。2年浪人して伝道に出ることはできないと思っていましたが、主は私の祈りを聞き届けてくださいました。

1984年1月から1年6カ月の間、名古屋伝道部で働く機会を頂きました。伝道中は多くの信仰を強められる経験をしましたが、特に岐阜県高山市での経験は私にとって特別なものでした。一時期、伝道本部に所属する宣教師として働いていた時に、高山の宣教師ア

パートが老朽化していたため、伝道部長と新しいアパートを探しに行くことになりました。不動産会社で説明を聞くと、あるアパートの2階と3階が一室ずつ空いていました。私は、2階がいいと思いましたが、伝道部長は3階の部屋を選びました。

それから数カ月して、私は高山支部の支部長として高山へ転任し、そのアパートに住むことになりました。小さな支部で、活発な大神権者がひとりもいませんでした。しかし、よく調べてみると、教会に来ていないひとりの大神権者がいるのに気づきました。私と同僚はあらゆる手を尽くして彼の居場所を捜しましたが、わからずじまいでした。最後にもう一度、教会に反対していたその方のご家族に尋ねることにしました。電話でお話ししましたが、その時の模様をよく覚えています。「あの大通りをまっすぐ。（はい）大きな〇〇さんの屋敷があります。（私たちの宣教師アパートのすぐ近くだ）前に大きな本屋さんがあります。（えっ）〇〇アパートです。（同じアパートだ）3階の。（同じ階だ）302号室です。（絶句）」高山は、人口5万人ほどの町ですが、こともあろうに捜していたその方は、私たちのアパートの隣の部屋に住んでいらっしゃるのです。



竹馬ご家族

大変忙しい毎日をごしました。朝から夜遅くまで実験と診療に明け暮れ、合間を縫って教会の責任を果たしました。しかし、思うように事は進みません。実験はことごとく失敗し、家庭での時間も満足に取れず、教会の責任も満足に果たせませんでした。こんなことまでして学位を取得する必要があるのかと迷いながら、月日だけが過ぎていきました。

実験を始めて5年後、やっと論文がまとまり、昨年学位を取得することができました。この5年間は私の人生でいちばん大変な時期でした。父親として、夫として、また、支部長として、

私たちはすぐに隣の部屋を訪問しました。その兄弟は私たちが隣に住んでいることをご存じでした。その夜、彼は泣いて教会に戻りたいと申し出て下さいました。しばらくして副支部長に召され、りっぱな働きをして下さいました。アパートを決めるという一見ささいなことの中にも、神様のみ手が働いていたことを痛感しました。

帰還後、以前所属していた大学病院に戻ることができ、以前神殿でお会いした姉妹と東京神殿で結婚しました。1年ほど、佐世保の病院で働き、転勤の時期を迎えました。鹿児島地方部の神殿訪問の折に、どの病院に行くべきか、妻と一緒に神殿で祈りました。ある病院に転勤するよというみたまのささやきを耳にしましたが、そこは私が伝道に行く前に勤めていた病院でした。伝道に出るために病院をやめることを伝えると上司の先生は、あきれ果てて私をまったく無視するようになりました。上司の先生と和解するのは無理なように思えました。どうしてまたその病院に……としましたが、みたまのささやきに従い、その病院へ転勤しました。

勤めだしてその先生との関係は徐々によくなり、1年後にほかの病院に転勤する時には、「ぜひまた来てくれ」と言ってもらえるほどになりました。その先生は数年後に若くして癌で他界されました。思い返せばあの1年が先生との貴重な和解の時でした。

その後、大学病院に戻り学位を取得するために糖尿病の実験を始めました。そのころ長崎支部の支部長に召され、

満足な働きができませんでした。その間、私を陰で支えてくれた家族や教会の皆さん、そして神様に心から感謝しています。

旧約聖書の創世記にサタンはキリストのかかとを砕くだろうが、キリストはサタンの頭を砕くと記されています。(創世3:15参照) 私は教会員になって「ああ、もうだめだ」と思ったことが何度もありました。それは致命的な傷のように思えますが、実際は足を砕かれただけでした。キリストは、サタンの頭を砕きます。神様に従うとき、思ってもみない方法で新しい道が開け、不可能に思えたことが可能になりました。

絶望するとき、それは多くの場合、自分の罪が問題になりますが、悔い改めることによって奇跡が起こります。私はこの悔い改めの力、また、神様が私たちを導いてくださる聖霊の力に心から感謝しています。(ちくば・やすひろ 第一副支部長)

若い女性のキャンプに友人を誘って

——家出の子と登校拒否の子が決心した日——

町田ステーキ部町田第1ワード部 阪本潔美(17歳)

1992年の夏休み、若い女性(中・高校生)のキャンプに友達をふたり連れて行きました。ふたりともわがままなところがあって、団体行動が苦手で、学校では先生や友達とよくトラブルを起こしていました。



当時、ふたりのうちひとり家は飛び出して、近くに住んでいるおばあさんの家で3カ月ほど生活していて、もうひとは登校拒否のために、学校にほとんど行っていませんでした。私はふたりをキャンプに誘ったらよいと思いましたが、面倒なことが嫌いなふたりが、キャンプに来てくれるかが第1の問題でした。

第2の問題は、キャンプ場へ行くには何時間も山道を歩かなくてはならないことと、すべて自分たちで行なう共同生活なので、ふたりがそれに耐えられるかということでした。

第3の問題は、このようなふたりを若い女性のみんが受け入れてくれるかということです。この点については、若い女性のみんなならだいたいようぶだという自信はありましたが、それでも

少し不安が残りました。

ふたりにキャンプの話をして誘った時、最初はふたりともどうしようか考えていましたが、やがて行くと言ってくれました。

キャンプ当日は、父が車で山のふもとまで送ってくれました。そこから先は通りかかったトラックのおじさんがキャンプ場まで乗せて行ってくれました。

キャンプの間、ふたりは心配したとおりレクリエーションに参加しなかったり、自分かたな行動を取ったりしていましたが、若い女性のみんなは、少しも怒ったりしないで彼女たちに理解を示してくれました。

そしていよいよ最後の証会の日、

ふたりは出席するのを嫌がっていましたが、私が「座って聞いているだけでいいから」と説得して、なんとか出席してもらいました。私はふたりが証会の間うるさくしないか心配でした。でも証会が終わってみると、ふたりともどういう訳か黙って座ったまま全然動こうとしません。この日は朝から断食していたので、あまりにおなかのすきすぎて力が入らないのかとも思いました。私が「どうしたの?」と言うと、やっと立ち上がりました。

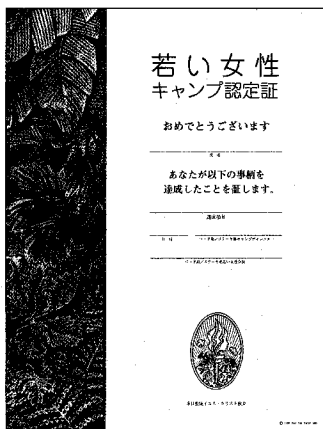
帰りの山道でも無口で、証会の感想を聞いても何も言ってくれません。ふたりに証会に参加させたのは間違っていたんじゃないかと思いましたが、そ

の日はそのまま彼女たちを家の近くまで送って別れました。

数日後、家出をしていた子のお母さんと私の母が会った時に、その子が家に戻ったことと、私たちにとても感謝していたということを母から聞きました。その子はキャンプが終わるとそのまま自分の家へまっすぐに帰ったそうです。登校拒否をしていた子も、その後だんだん学校に行くようになって、今では普通に学校に行っています。ふたりとも両親を批判することは、それ以来ほとんどなくなりました。後にひとりの子が、証会で若い女性のみんなが「両親に感謝しています」と言っているのを聞いて、とても反省したと

ブックセンターから

新刊紹介



●若い女性キャンプ手引き

カタログ番号34573 300 A4変96頁 価格500円
若い女性がキャンプ活動を計画し、実施するための手引き。若い女性と若い女性指導者、キャンプディレクター、そのほか基本的なキャンプ技術を学びたい方用。★無料交付品

●若い女性キャンプ認定証

カタログ番号34683 300 A4変 価格30円
若い女性がキャンプ技術のそれぞれの階級を完了するときに授与される。

●若い女性キャンパーワッペン

カタログ番号34681 価格110円
キャンププログラムに参加するすべての若い女性と成人指導者用。

●若い女性キャンプ指導者ワッペン

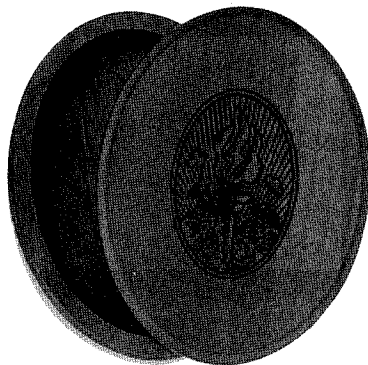
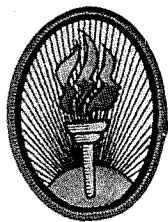
カタログ番号34682 価格110円
キャンプ技術の訓練を修了した成人と青少年のキャンプ指導者に授与される。

●若い女性キャンプ技術賞—木彫箱

カタログ番号34684 127×95×38mm 価格700円

すべてのキャンプ技術の階級を完了したときに授与される。(任意)「若い女性キャンプ指導者ワッペン」と同様のデザインが木ぶたにレーザーによって彫刻されている木製の小箱。

注：この商品は、監督/支部長による注文のみ受け付けます。



言ってくれました。

キャンプに参加しただけで彼女たちがそこまで変わるとは思っていなかったもので、とても驚きました。今思い起こしてみると、当日の証会あかしかいはほんとうにすばらしくて、神様のみたまを彼女たちが強く感じ、それであれほど変

わったのだと思います。私はこのことから、若い女性のキャンプが神様から与えられたプログラムだという証を持つことができました。

短い期間に多くの模範を示し、友達を受け入れてくれた若い女性のみなさんや協力してくれた家族、指導者に感

謝しています。また、いつも天のお父様の助けがあったことに感謝しています。私たちが正しいことを行なおうとするときに天のお父様は必ず助けてくださることを証します。(さかもと・きよみ 1995年1月22日、町田ステークス大会でのお話より)

JMTC

ローカル

2月に召された専任宣教師

第185期生 9人



後列左から1-5, 前列左から6-9

〈名前〉

1. 森島直樹
2. 鳥越勇
3. 中川利光
4. 浅田秀一
5. 山内周
6. 山下恵子
7. 北谷伊津美
8. 白鳥富子
9. 中山あい子

〈出身地〉

- 東京北S/川越W
 仙台M/青森D/三沢B
 福岡S/藤崎W
 神戸M/福知山D/豊岡B
 東京S/三鷹W
 大阪堺S/河内長野W
 岡山M/高松D/高松B
 町田S/町田第1W
 名古屋西S/御器所W

〈伝道地〉

- 岡山伝道部
 沖縄伝道部
 東京南伝道部
 岡山伝道部
 名古屋伝道部
 福岡伝道部
 東京南伝道部
 福岡伝道部
 福岡伝道部

S:ステークス部, M:伝道部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

お知らせ

役員の変動

1994年12月29日から1995年1月31日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 青森地方部青森支部
新支部長:三上敬
(前任者:長内利剛)
- 郡山地方部津若松支部
新支部長:梶内英一
(前任者:高橋信幸)
- 横浜ステークス部川崎ワード部
新監督:木島直人
(前任者:高江洲薫)
- 鹿児島地方部谷山支部
新支部長:相良真実
(前任者:瀬座一義)

皆さんの原稿を
募集しています

◎ご投稿の際には連絡先(住所, 電話番号), 教会での責任(役職名), 所属ユニット名と併せて生年を記入し, 写真を同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また, 掲載までに時間がかかる場合もありますので, ご了承ください。

◎あて先

〒106 東京都港区南麻布5-10-30
 末日聖徒イエス・キリスト教会
 「聖徒の道」編集室
 電話03(3440)2666

ファクシミリ03(3440)3275